

平安京右京三条一坊三町（右京職）跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条一坊三町（右京職）跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様に広く公開し活用いただけるよう努めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第3冊目として、このたび京都簡易保険新型健康増進施設（仮称）の新築工事に伴います平安京跡の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げる次第です。

平成14年9月

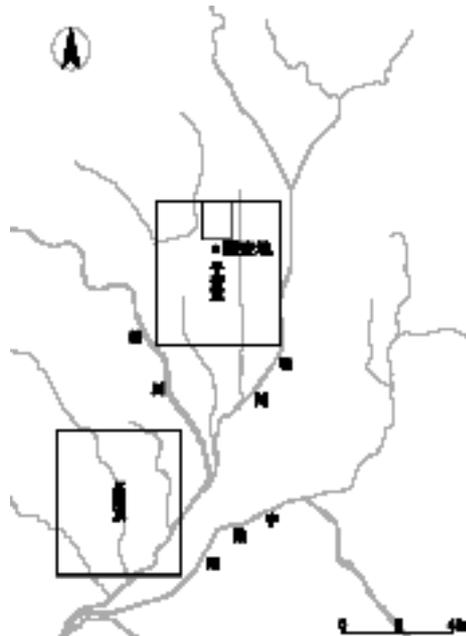
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京三条一坊三町（右京職）跡
- 2 調査地点所在地 京都市中京区西ノ京梅尾町1丁目7番地他
- 3 委託者及び承諾者 簡易保険福祉事業団
- 4 調査期間 2001年2月1日～2001年10月16日
- 5 調査面積 3,192㎡
- 6 調査担当職員 平尾政幸・山口 真
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前） 平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した）
- 10 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 11 遺物番号 挿図の順に瓦類・土器類ごとに通し番号を付した。
- 12 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 13 作成担当職員 平尾政幸・山口 真・上村和直

（調査地点図）



目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺 構	3
(1) 層 序	3
(2) 平安時代以前の遺構	7
(3) 平安時代前期の遺構	7
(4) 平安時代末期の遺構	9
(5) 近世末期から近代の遺構	11
3 遺 物	12
(1) 瓦 類	12
(2) 土器類	15
4 . ま と め	27

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 調査区全景 (北から)
		2 朱雀大路西側溝SD100と築地痕跡 (北から)
図版 2	遺構	1 築地瓦落ちSX237 (西から)
		2 築地柱列SA008 (南西から)
図版 3	遺構	1 井戸SE099 (北から)
		2 井戸SE150 (北から)
図版 4	遺構	1 北西部Pit群 (南東から)
		2 溝SD234 (東から)
図版 5	遺構	1 溝SD222・255 (南東から)
		2 建物SB004土器出土状況 (北から)
図版 6	遺構	1 井戸SE200 (東から)
		2 土壌SX011 (北西から)
図版 7	遺物	軒平瓦
図版 8	遺物	軒丸瓦
図版 9	遺物	SD222・255出土土器 1
図版 10	遺物	SD222・255出土土器 2

挿 図 目 次

図1	調査地位置図 (1 : 2,500)	1
図2	調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図3	調査前全景	3
図4	調査状況	3
図5	遺構実測図 (1 : 400)	4
図6	西壁断面図 (1 : 200)	5
図7	北壁断面図 (1 : 100)	6
図8	SE099実測図 (1 : 20)	7
図9	SE150実測図 (1 : 20)	8
図10	SD234実測図 (1 : 40)	8
図11	整地層断面図 (1 : 50)	9
図12	SE200実測図 (1 : 20)	10
図13	瓦拓影・実測図 (1 : 4)	14
図14	SX283出土土師器・黒色土器実測図 (1 : 4)	16
図15	SX283出土須恵器・輸入陶磁器実測図 (1 : 4)	17
図16	SX283出土緑釉陶器・灰釉陶器実測図 (1 : 4)	18
図17	SX283出土墨書土器 (1 : 2)	19
図18	SX283出土硯・土馬実測図 (1 : 4)	19
図19	SE099出土土器実測図 (1 : 4)	20
図20	SE219出土土器実測図 (1 : 4)	20
図21	SD234出土土器実測図 (1 : 4)	20
図22	SE150出土土器・石材実測図 (1 : 4)	21
図23	SD222・255出土遺物実測図 (1 : 4)	23
図24	SD100出土土器実測図 (1 : 4)	24
図25	SB004出土土器実測図 (1 : 4)	25
図26	石鏃実測図 (1 : 1)	25
図27	古墳時代の須恵器実測図 (1 : 4)	25
図28	SD010出土土器実測図 (1 : 4)	26

表 目 次

表 1	右京三条一坊三町調査一覧表	2
表 2	遺構一覧表	11
表 3	SX283の土器比率表（破片数）	15
表 4	SE150の土器比率表（破片数）	21
表 5	SD222・255の土器比率表（破片数）	22
表 6	遺物概要表	26

付 表 目 次

付表 1	SX283出土遺物一覧表	28
付表 2	SE099出土土器一覧表	36
付表 3	SE219出土土器一覧表	36
付表 4	SD234出土土器一覧表	36
付表 5	SE150出土遺物一覧表	37
付表 6	SD222・255出土遺物一覧表	38
付表 7	SD100出土土器一覧表	41
付表 8	SB004出土土器一覧表	42
付表 9	SD010出土土器一覧表	43
付表 10	平安時代以前の遺物一覧表	44

平安京右京三条一坊三町（右京職）跡

1. 調査経過

この調査は、JR二条駅前に計画された京都簡易保険新型健康増進施設（仮称）の新築工事に伴うものである。調査対象地は平安京右京三条一坊三町の東部に該当しており、右京職東辺部の諸施設および朱雀大路西側溝の検出が予想された。

周辺ではこれまでにJR二条駅周辺の再開発に伴う埋蔵文化財の調査が多数行われており、この右京職や朱雀大路に関連する遺構を検出している。三町に限ってみても平成3年度以降7件の調査を実施しており（表1）、姉小路北側溝・三条坊門小路南側溝など平安京の条坊に関連する遺構を確認している。特に平成9年度の調査では右京職の主要施設とみられる大型礎石建物2棟をはじめとする遺構群や「右籍所」「計帳所」といった右京職内の部署名が墨書された土器が出土するなどの重要な成果を得た。また、今回の調査と同年度に実施したJR二条駅周辺拠点整備事業に伴う発掘調査では、右京職の北西隅の築地や溝などを確認することができた。

今回はこの右京職の東辺部と朱雀大路西側溝を含む形で東西約30m×南北約90mの調査区と、その北端部東側に路面確認のため拡張区を設定し調査を実施した。

調査の結果、右京職に関連する時期の遺構として、井戸3基、掘立柱建物の一部、内溝、築地およびその両側の瓦落ち、整地層などを、またその他、平安時代前・末期の建物、井戸、溝、土壘、近世末から近代の溝、井戸や水路など耕作関係の遺構を検出した。

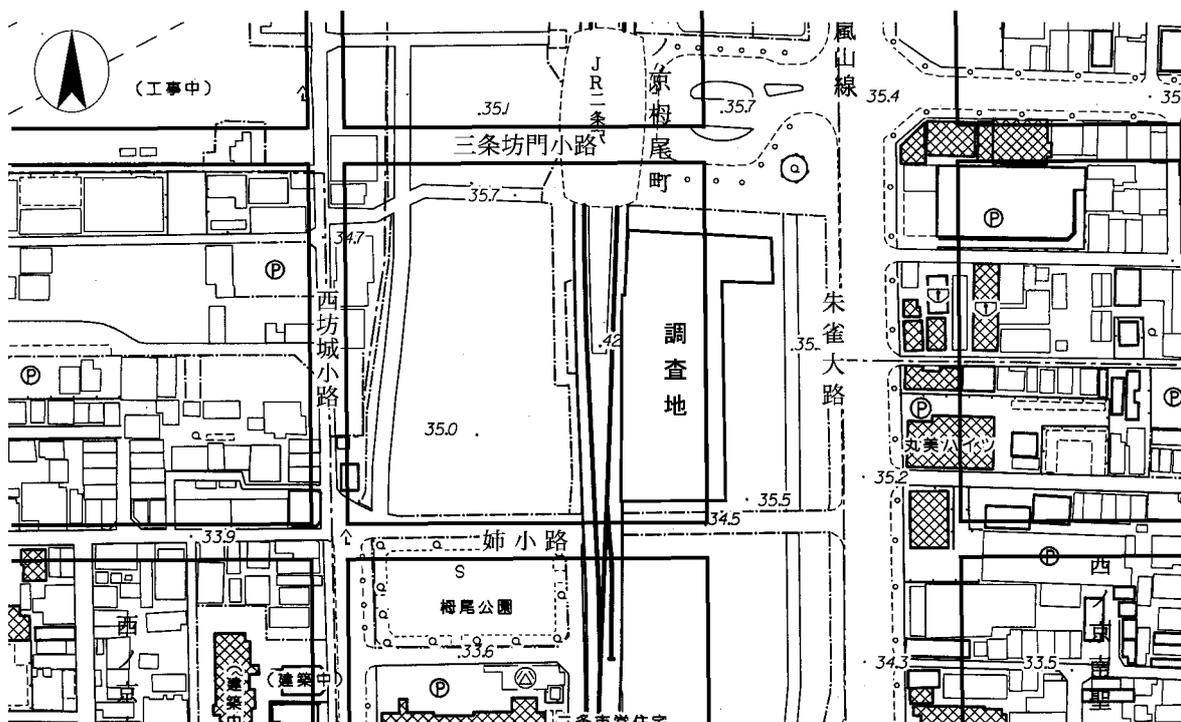


図1 調査地位置図（1：2,500）

三条坊門小路

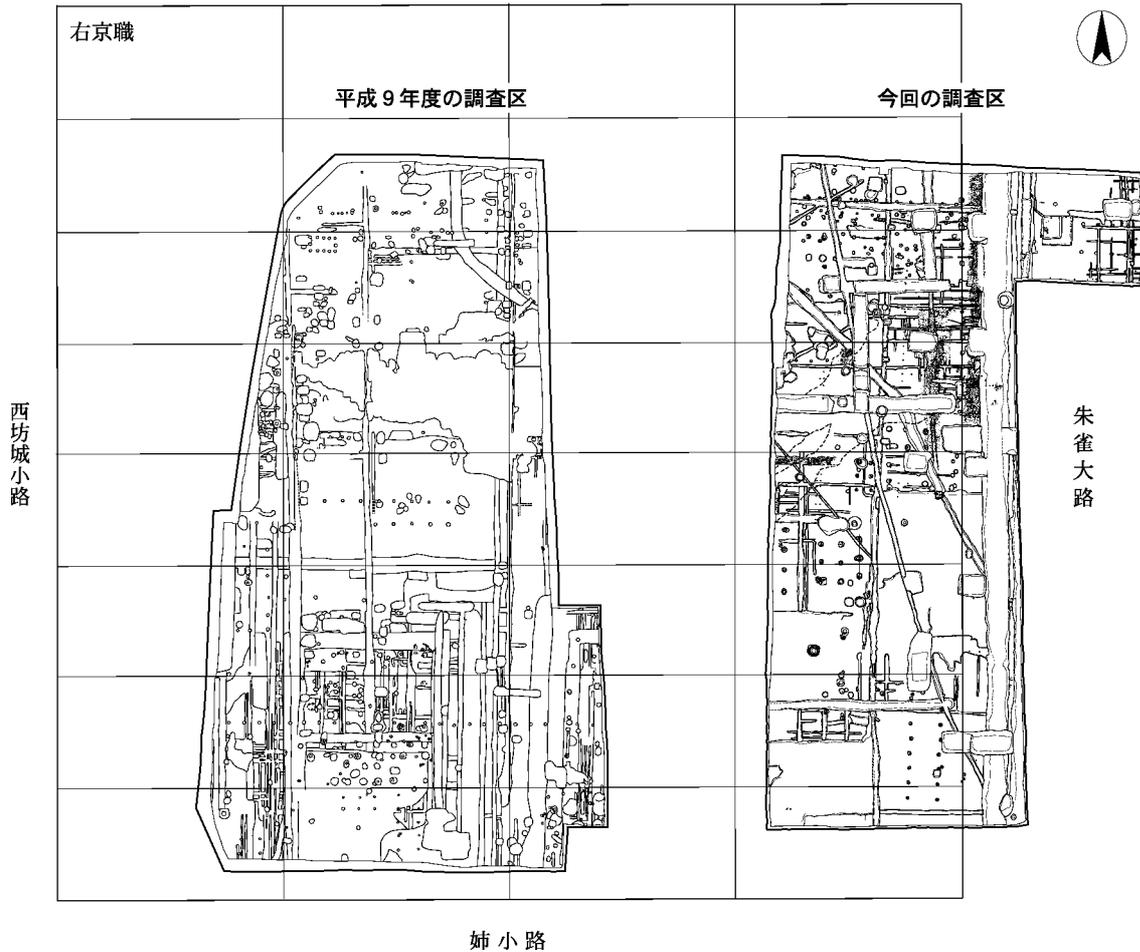


図2 調査区配置図(1:1,000)

表1 右京三条一坊三町調査一覧表

年度	遺跡名	調査法	面積	主な遺構	文献
1992	右京三条一坊三・四町	試掘	419m ²	朱雀大路西側溝、 姉小路南側溝	『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1995年
1994	右京三条一坊三・四町	発掘	848m ²	姉小路北側溝、土壇、柱穴	『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1996年
1994	右京三条一坊三町	試掘	320m ²	溝、柱穴、地業跡	”
1995	右京三条一坊二・三町	試掘	247m ²	三条坊門小路南北両側溝、 建物、土壇、湿地	『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1997年
1996	右京三条一坊三町	発掘	296m ²	姉小路北側溝、 朱雀大路西側溝、自然流路	『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1998年
1996	右京三条一坊三町	発掘	4680m ²	礎石建物、掘立柱建物、 井戸、溝、柵列、自然流路	『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1999年
1998	右京三条一坊三・六町	発掘	313m ²	柱穴	『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2000年

朱雀大路の西側溝は調査区の北端から南端の約90mにわたって検出したが、その西側の一部には上述の築地の痕跡と、それに沿う瓦落ちを確認した。大路の路面については近世末から近代の

溝や耕地により削平されたものと思われ、路肩の一部を確認したのみである。

またこのほか、下層の遺構として調査区北部で北東から南西方向へ流れる流路跡を検出した。弥生土器と見られる土器の小片や火山灰（二次堆積）を含んでいる。上記の整地層の範囲は、ほぼこの流路上に限られており、この流れの最上層の湿地状の地形を整地したものとみられる。下層の流路の影響で地盤が悪いため何度も整地が繰り返されたようで、この整地層に含まれる遺物の年代は9世紀前半～10世紀前半と時期幅をもつが、それ以降の遺物は全く含まない。さらに、整地層のみならず今回の調査区全域についても、その後、平安時代末頃までの時期の遺構・遺物が確認されないことから、おそらくこの場所で右京職が存在していた期間は10世紀前半頃までで、それ以降平安時代末期に再利用されるまでは空閑地に近い状況であったものと思われる。

2 . 遺 構

(1) 層 序

調査開始時点での調査地は、JR二条駅関係の施設や貨物引き込み線を撤去した後、敷地全域が整地された状態であった。この整地は敷地南西の一部が一段低くなっていたが、その他の部分は周辺の道路面とほぼ同一の高さに整えられていた。このため現表土面からの深さは場所によって異なり、調査区東部では約1.5～1.2、南西部では0.8の盛土を除去した標高35.0前後で全面に旧耕土層を確認した。この旧耕土層とその直下に検出した砂礫層の地山面は水路と思われる小溝に区画された範囲ごとに水平面をなして北から階段状の地勢を形成しており、この耕作地が水田として利用されていたことを示している。右京域で一般的に検出される平安時代の遺構面となる黄褐色の砂泥層は、この地域が水田化される時点で広範に削平されたようで、調査区北側の一部と旧流路跡の湿地の範囲を除いてほぼ全域に砂礫層を確認した。各時代のほとんどの遺構はこの砂礫層の地山面上で検出した。遺構は、大きく平安時代以前・平安時代前期・平安時代末期・近世末期から近代の4時期に分けることができる。以下、時期の順を追って概略を述べる。



図3 調査前全景



図4 調査状況

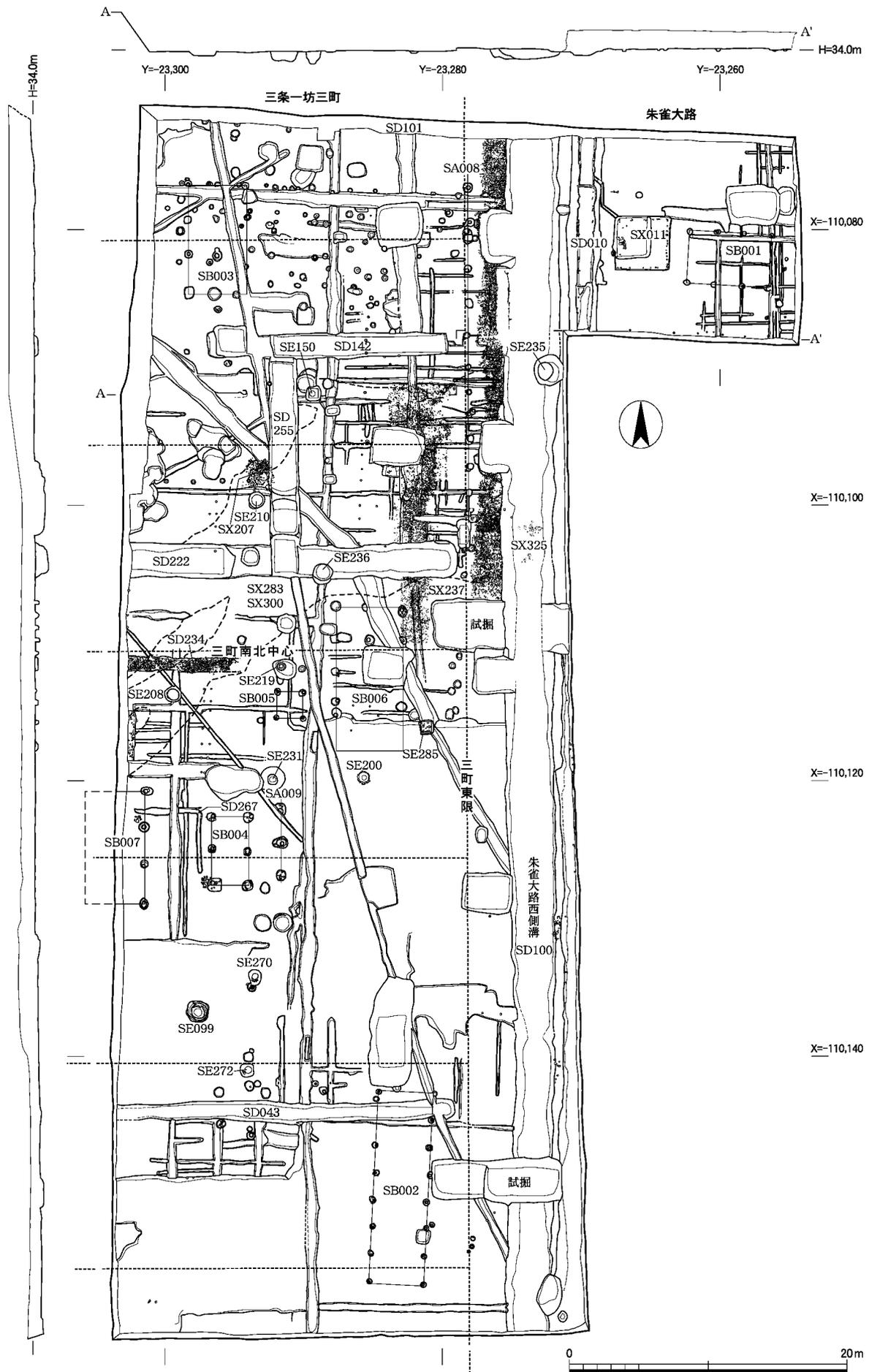
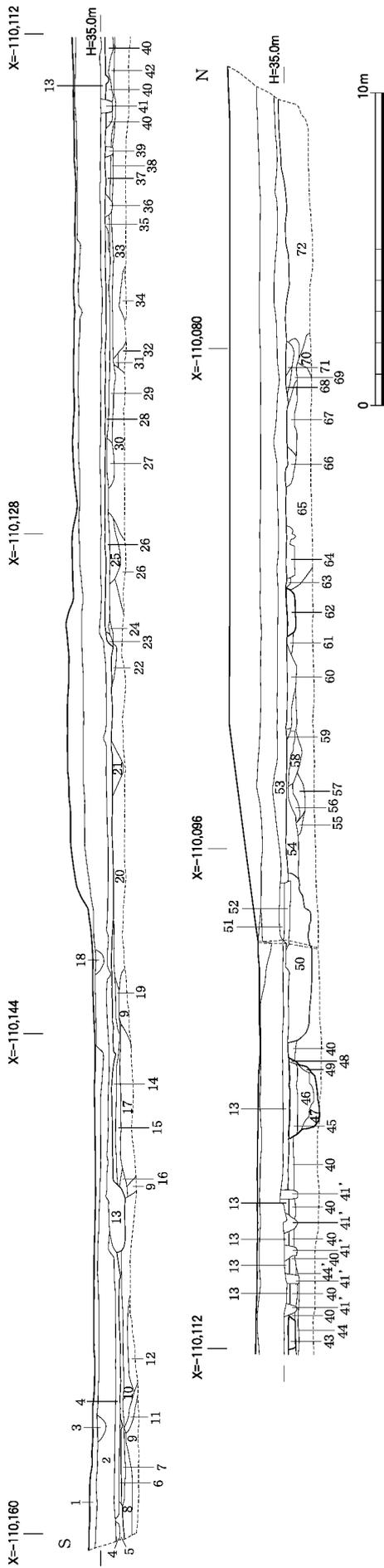
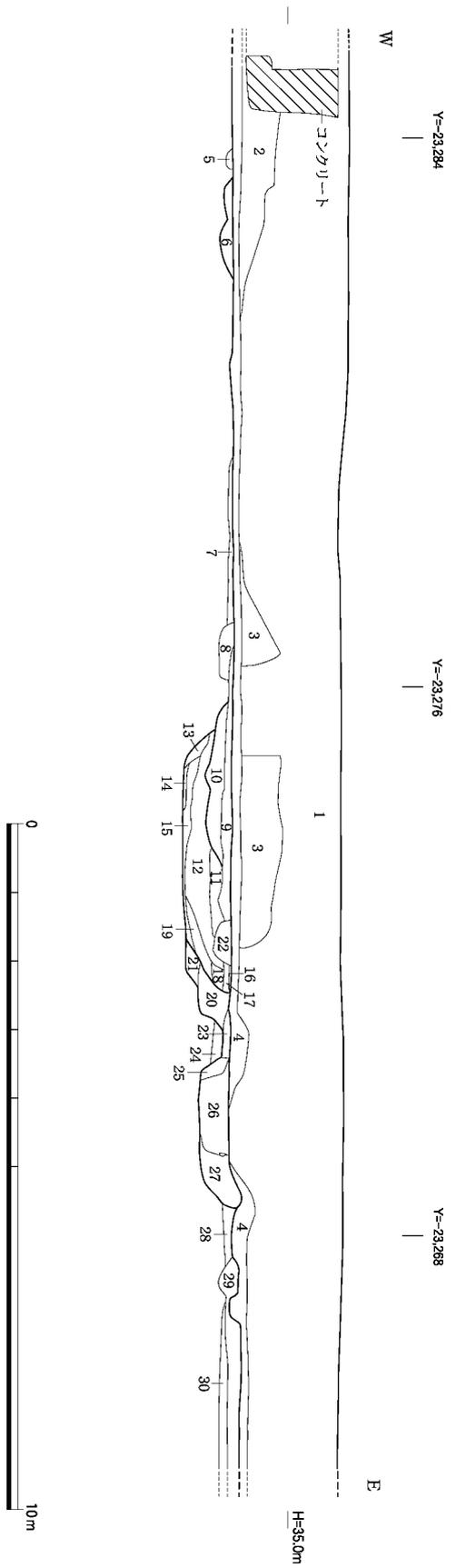


図5 遺構実測図(1:400)



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、直径0.5~20cm大の礫を含む
- 2 10YR5/6黄褐色泥砂、直径0.2~25cm大の礫多量を含む(盛土)
- 3 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂、直径0.2~20cm大の礫多量を含む
- 4 2.5Y4/1黄灰色砂泥、炭・土器片含む
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、直径0.2~3cm大の礫混じり炭・土器器片少量含む
- 6 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、直径0.2~15cm大の礫6より多量に混じり土器器片含む
- 7 2.5Y6/3にぶい黄褐色泥砂、直径0.2~20cm大の礫多量を含む
- 8 10YR5/6黄褐色泥砂、直径0.2~20cm大の礫多量を含む
- 9 10YR3/1黒褐色砂泥
- 10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂
- 11 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂
- 12 10YR6/4にぶい黄褐色泥砂
- 13 10YR4/1褐色砂泥、直径0.2~15cm大の礫・土器器・瓦・木・炭片を少量含む(近世耕土)
- 14 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂、直径0.5~5cm大の礫・土器器・炭片を少量含む(織倉包含層)
- 15 10YR5/2暗灰黄色砂泥、直径0.2~15cm大の礫多量を含む
- 16 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂、直径0.2~15cm大の礫多量を含む
- 17 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
- 18 10YR6/4にぶい黄褐色泥砂、直径0.5~12cm大の礫多量を含む
- 19 10YR6/2暗灰黄色砂泥、直径0.2~5cm大の礫多量を含む
- 20 10YR5/2暗灰黄色砂泥、少量の10YR3/2黒褐色粘土混じる
- 21 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、直径0.5~12cm大の礫多量を含む
- 22 10YR4/2暗灰黄色砂泥、直径0.2~10cm大の礫多量を含む
- 23 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂、直径0.2~5cm大の礫・土器器片含む
- 24 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、直径0.2~10cm大の礫多量を含む
- 25 7.5Y5/3にぶい褐色砂泥
- 26 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 27 10YR3/2黒褐色砂泥、直径0.5~10cm大の礫多量を含む他、土器器・炭片少量含む
- 28 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、直径0.5~3cm大の礫少量含む、微量の土器器・炭片が混じる
- 29 10YR3/3暗褐色砂泥、直径0.2~5cm大の礫・土器器片少量含む
- 30 10YR3/2黒褐色砂泥
- 31 10YR4/2暗灰黄色砂泥
- 32 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂に5Y4/3暗オリーブ色泥砂が少量混じる
- 33 2.5Y3/1黄褐色砂泥
- 34 32とほぼ同じ、10YR2/1黒褐色粘土混じる
- 35 10YR5/2暗灰黄色砂泥
- 36 10YR5/2暗灰黄色砂泥、土器器片含む
- 37 10YR6/3にぶい黄褐色泥砂、土器器片含む
- 38 10YR6/1褐色砂泥、土器器片含む
- 39 10YR5/2暗灰黄色砂泥
- 40 10YR5/2暗灰黄色泥砂
- 41 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 41' 41とほぼ同じ
- 42 10YR6/2暗灰黄色泥砂、直径0.5~15cm大の礫・土器器片少量含む
- 43 10YR7/2にぶい黄褐色泥砂、直径0.2~10cm大の礫・土器器片少量含む
- 44 10YR5/1褐色砂泥、直径5cm大の礫・炭片含む
- 44' 44に33が混じる
- 45 10YR7/2~7/3にぶい黄褐色泥砂、直径0.2~10cm大の礫多量を含む(SD222)
- 46 10YR5/2暗灰黄色砂泥、土器器片含む(SD222)
- 47 10YR3/2やや粘質の黒褐色泥砂に2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂混じり、土器器片含む(SD222)
- 48 10YR6/3暗灰黄色砂泥、直径0.5~1cm大の礫少量含む46混じる(SD222)
- 49 10YR3/3暗灰黄色砂泥、直径0.2~10cm大の礫・土器器・炭片少量含む(近世土探り跡)
- 50 2.5Y3/2黒褐色砂泥、直径0.2~10cm大の礫・土器器・炭片少量含む
- 51 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、直径0.2~10cm大の礫多量に混じり、土器器・炭片少量含む
- 52 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、直径0.2~3cm大の少量の礫・土器器・炭片含む
- 53 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、直径0.2~3cm大の礫多量に混じり、土器器・炭片少量含む
- 54 2.5Y5/3黄褐色砂泥、直径0.2~5cm大の礫多量を含む
- 55 2.5Y6/6明黄褐色砂泥、やや粘質
- 56 2.5Y7/3残黄褐色砂泥、直径0.2~10cm大の礫
- 57 2.5Y6/2暗灰黄色砂泥、直径0.2~15cmに2.5Y3/2黒褐色粘土少量混じる
- 58 2.5Y6/6明黄褐色砂泥、2.5Y6/2暗灰黄色砂泥、2.5Y7/1灰色砂泥、直径0.2~10cm大
- 59 2.5Y6/3にぶい黄褐色泥砂、直径0.5~2cm大の礫
- 60 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、直径0.2~5cm大の礫多量を含む
- 61 10YR3/2暗灰黄色砂泥、直径0.2~4cm大の礫多量を含む
- 62 10YR5/2暗灰黄色砂泥、直径0.5~10cm大の礫少量混じる(SD199)
- 63 2.5Y7/4残黄褐色砂泥、土器器片含む
- 64 2.5Y4/3やや粘質のオリーブ褐色泥砂、直径0.2~15cm大の礫が多量に混じり、土器器・炭片少量含む
- 65 2.5Y6/3にぶい黄褐色泥砂、5Y5/2暗オリーブ色泥砂、直径0.2~5cm大の礫少量混じる
- 66 2.5Y5/4黄褐色砂泥、直径0.5~5cm大の礫少量混じる
- 67 2.5Y7/3残黄褐色砂泥、直径0.2~15cm大の礫多量に混じる
- 68 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂、直径0.2~5cm大の少量の礫・土器器・炭片含む
- 69 10YR6/8~7/6明黄褐色砂泥、直径0.5~5cm大の礫少量混じる
- 70 10YR5/6黄褐色泥砂、直径0.1~4cm大の礫少量含む
- 71 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂
- 72 10YR5/2暗灰黄色砂泥に10YR3/2黒褐色粘土が少量混じり、10YR5/6黄褐色細砂層を含む

図6 西壁断面図(1:200)



- 1 10YR5/6 黄褐色泥砂、礫多く含む (近現代盛土)
- 2 2.5Y6/6 明黄褐色砂泥 (近現代盛土)
- 3 10YR6/6 明黄褐色砂泥 (近現代盛土)
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (近世耕土)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、直径2~6cm大の礫を含む (SD101)
- 7 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
- 8 2.5Y6/3 黄褐色砂泥 (SD100上層)
- 9 2.5Y6/3 にぶい黄褐色砂泥 (SD100上層)
- 10 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (SD100上層)

- 11 2.5Y5/3 黄褐色砂泥
- 12 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 13 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、直径1~4cm大の礫を含む
- 14 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥
- 15 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
- 16 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
- 17 2.5Y6/2 灰黄色砂泥
- 18 10YR7/1 灰白色砂泥
- 19 5YR6/2 灰褐色砂泥
- 20 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥、礫、瓦片多量に含む
- 21 10YR6/8 明黄褐色砂泥、礫、瓦片多量に含む

- 22 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (近世耕土)
- 23 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、少量の礫と多量の瓦片を含む
- 24 10YR4/1 褐灰色砂泥、直径2~5cm大の礫少量含む (盛地)
- 25 10YR3/2 黒褐色砂泥、礫大の礫多量に含む
- 26 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、直径1~10cm大の礫、灰、土師器・瓦などを含む (SD010)
- 27 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、少量の瓦を含む
- 28 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、少量の瓦を含む
- 29 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
- 30 2.5Y7/2 灰黄色砂泥

北壁断面図 (1:100)

(2) 平安時代以前の遺構

流路SX300 北東から南西方向へ流れる川跡。川幅は約12 。堆積土は暗灰褐色の粘質砂泥で、最終的には湿地状になっていたものである。この上面の数ヶ所で淡灰褐色の火山灰の堆積を確認したが、いずれも二次堆積と思われる。南岸部で弥生土器が、北岸部では古墳時代の須恵器が少量出土した。上層の湿地状の堆積の上部に平安時代の整地層が覆っている。

(3) 平安時代前期の遺構

建物SB005 井戸SE219の南に位置する1間四方の掘立柱建物。柱掘形は約40cm前後、柱間は1.8m(6尺)と小規模である。SE219に付属する施設か。

建物SB007 調査区西端に南北に3間分の柱列を検出した。柱掘形は約70cm前後、柱間は2.4m(8尺)。西側に延びる建物の一部である可能性が高い。

井戸SE099 構造は不明。最上層に多量の土器や瓦が堆積していた。下層は礫を含む暗灰色の粘質土。掘形は検出面で約1.6mの略円形、底部は約0.6mとすぼまり、鉢形の断面形を呈する。底部の標高は32.77m。出土遺物の時期は 期中¹⁾(9世紀後半)に属する。

井戸SE219 全体の構造は不明であるが底部に直径0.26mの曲物が残る。底部の標高は33.16m。遺物の時期は 期中(9世紀後半)に属する。

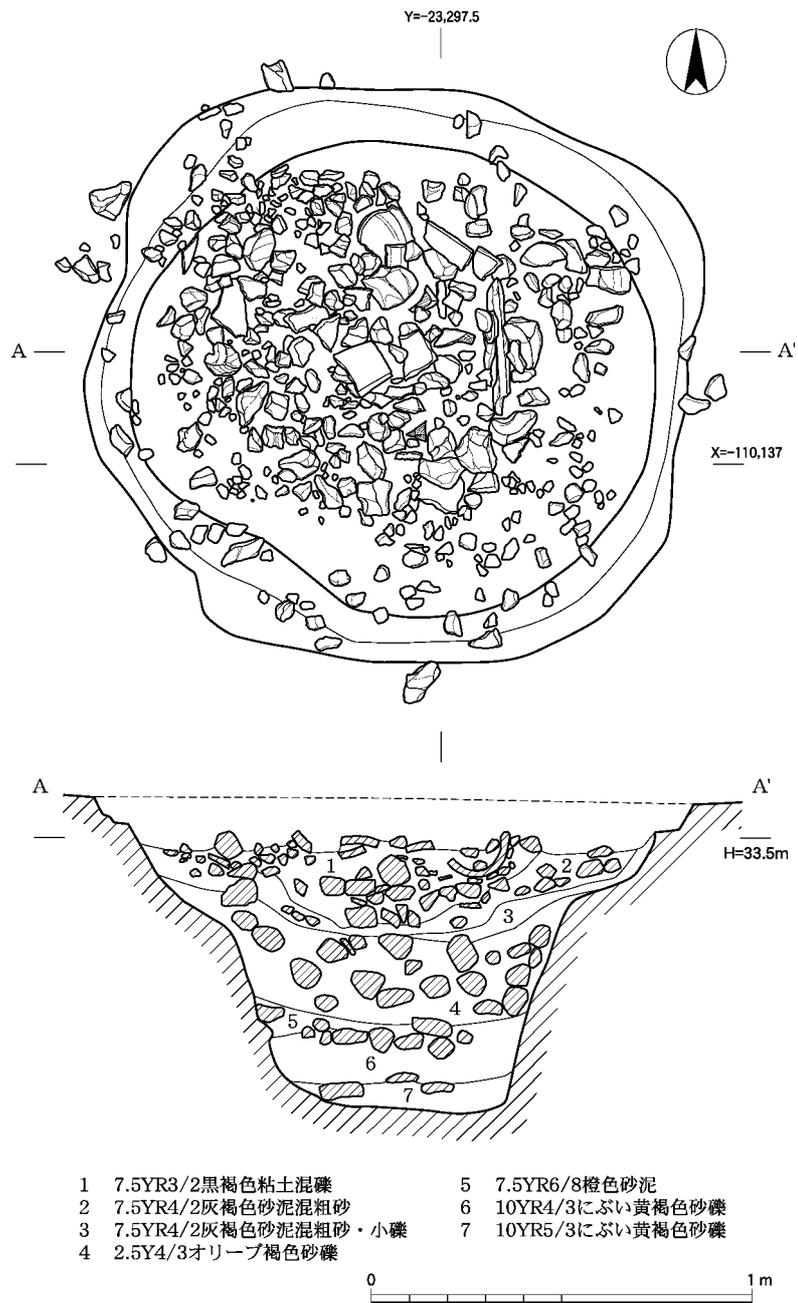


図8 SE099実測図(1:20)

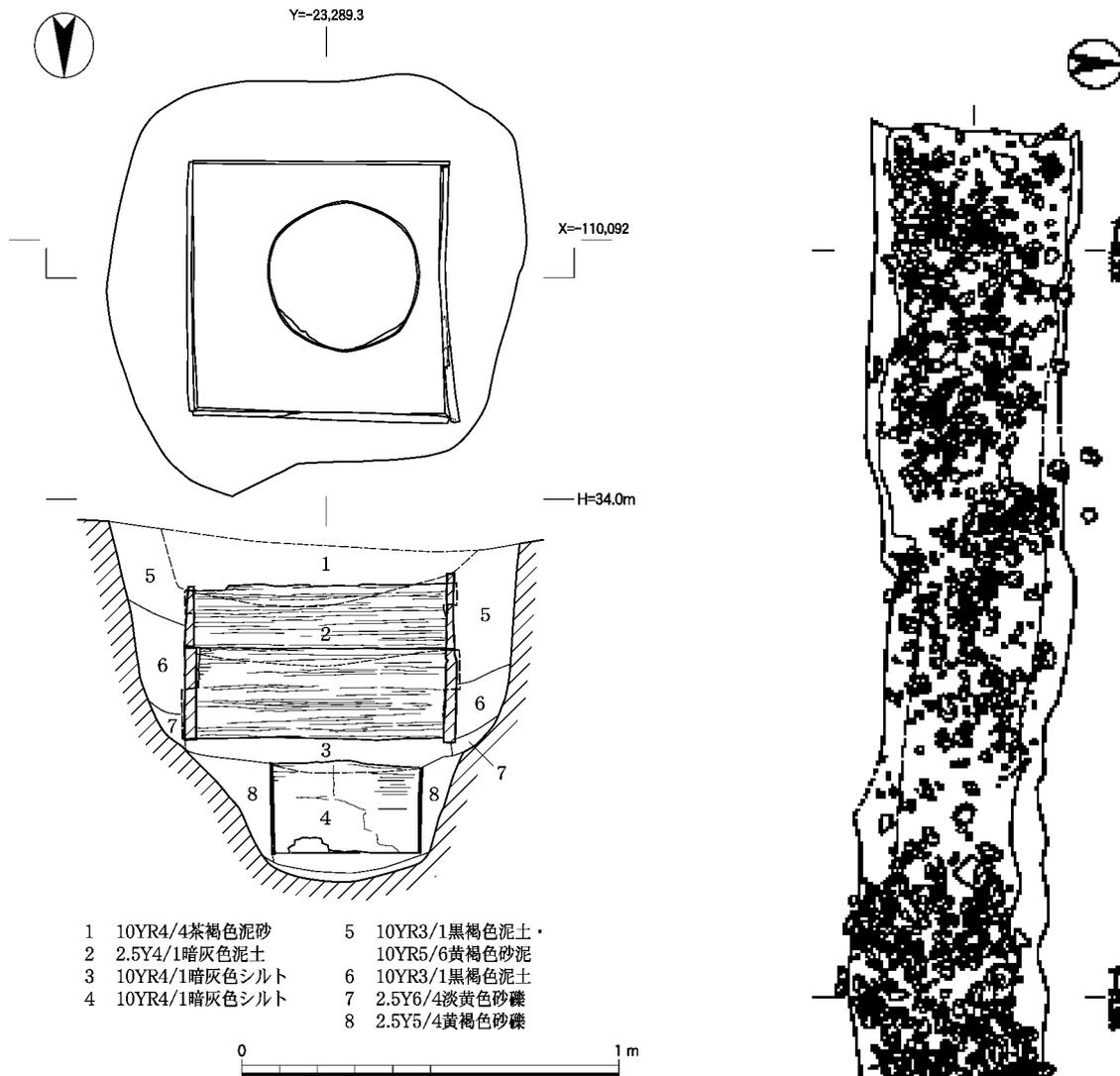


図9 SE150実測図(1:20)

井戸SE150 平安時代の井戸は3基検出したが、構造が判明したのはこのSE150のみである。1.1m程の隅丸方形の掘形内に蒸籠組の木枠2段を確認、木枠の一边は約0.7m。底部には径約0.4mの曲物を据えている。底部標高32.96m。少量だが、土師器を主体に形式的にまとまりのある土器類や石製帯飾りの原材とみられる切断痕のある石材が出土した。土器類の型式は 期新(10世紀初頭)に属する。

溝SD101 三町東面築地内溝。大部分削平されており、調査区北部でのみ検出したが、非常に浅く残存状態は良くない。溝内の埋土に9世紀前半の遺物を含んでおり、また築地の瓦落ちや整地層(SX283)の一部がこの溝の上部を覆っていることから、比較的早い段階で廃絶したものと考えられる。

溝SD234 三町の南北ほぼ中央に位置する東西溝。幅約

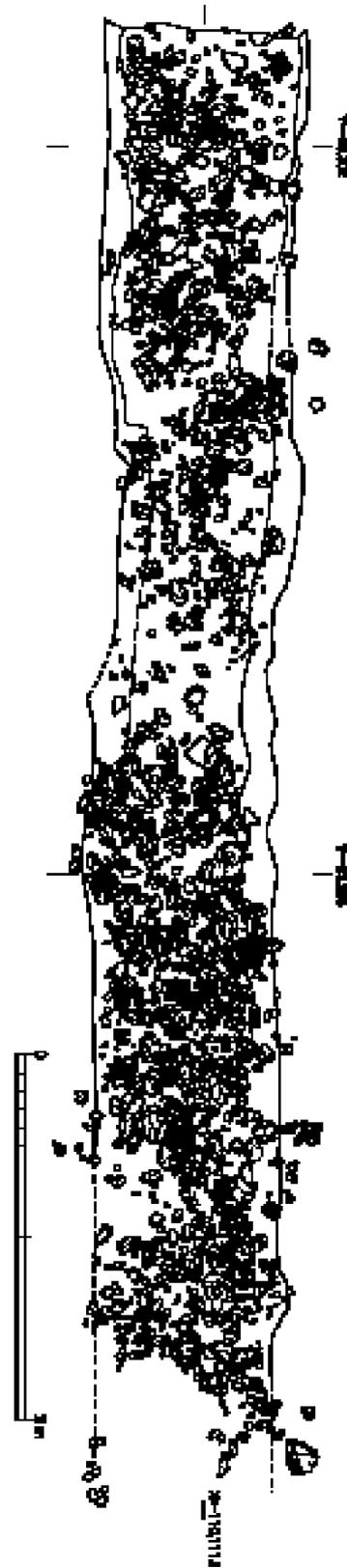


図10 SD234実測図(1:40)

1.0m、深さ0.2m。約8mを検出。西は調査区外へ延びる。東延長上に同時期の井戸SE219があり、それに関連する排水施設か。溝内堆積土には土器や瓦片が多い。

瓦落ちSX237 柱列SA008を挟んで両側に南北方向に多量の瓦が散布している。この間約2mほどの瓦の無い部分が築地の基底部と考えられる。

柱列SA008 三町東築地推定位置にほぼ重複して検出した。これが築地そのものの芯柱列か、あるいは築地廃絶後の柵（塀）の柱列なのか即断はできないが、三町東限を画する施設であることは疑いない。

整地層SX283 SX300埋没の最終段階に成立した湿地を埋めた整地層だが、最下層では9世紀前半、最上層では10世紀代の遺物を含んでいる。一部に砂礫を含んだ部分もあったが、全般的に暗褐灰色の泥土が堆積し、各層の質差が不明瞭である。そのため各時期の整地の単位は明確に分離できなかったが、概ね上層ほど新しい時期の遺物が出土している。整地が何度か繰り返し行われたようである。何箇所かで土器がやや集中している所もみられたが、遺物は全体的に分布し、特に際立った傾向は認められなかった。

(4) 平安時代末期の遺構

建物SB003 調査区北西隅に検出した南北3間×東西2間の南北方向の掘立柱建物。柱間は東西2.1m（7尺）等間、南北が北から2.4m（8尺）、2.4m（8尺）、3.0m（10尺）。柱掘形は0.4～0.6m。

建物SB004 南北2間×東西1間の掘立柱建物。柱間は南北2.4m（8尺）、東西2.7m（9尺）。柱掘形は0.5～0.6mだが、南西隅柱が約1.0mと他の柱掘形に比べ大きく、抜き取り跡から土師器が多量に出土した。

建物SB006 南北3間×東西2間を検出した。南の妻柱が検出されず、さらにもう1間程度南に延びる可能性もあるが、南方が一段低く削平され、確認できなかった。柱間は東西、南北ともに2.4m（8尺）等間。柱掘形は0.5m前後。

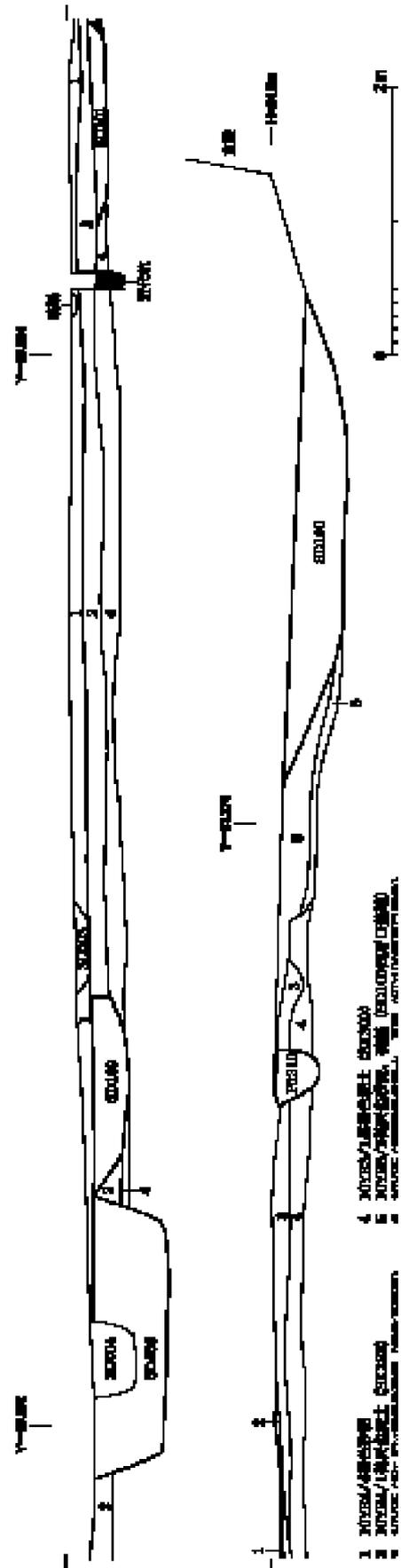


図11 整地層断面図(1:50)

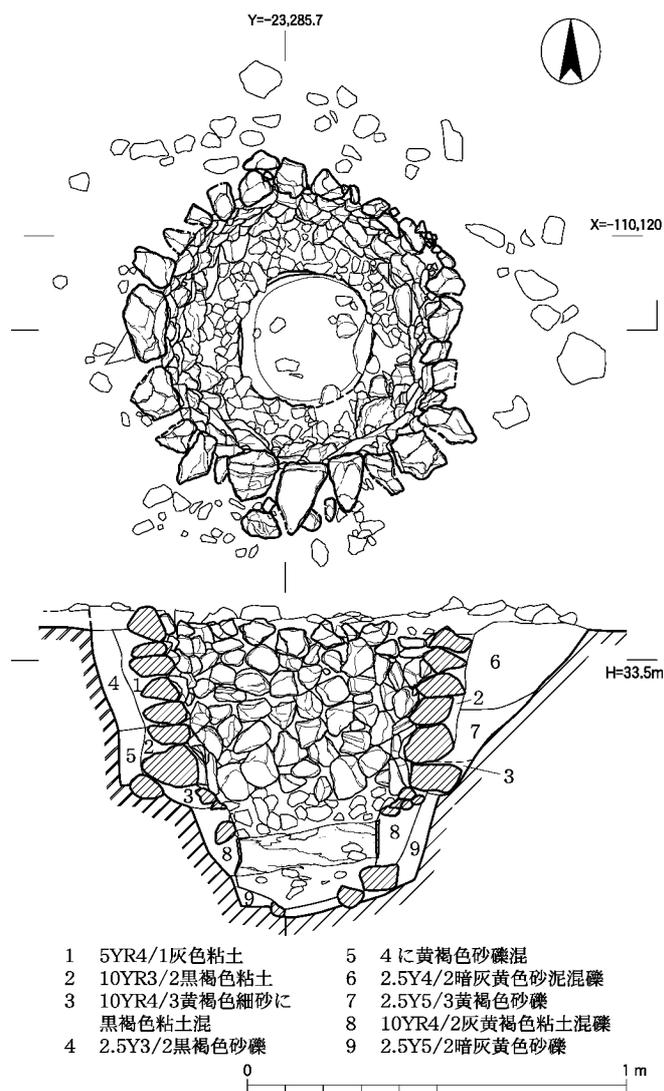


図12 SE200実測図(1:20)

井戸SE200 SB006の南に検出した直径約0.8mの石組み井戸。拳大程度の小振りな石材を用いて組まれている。底部に直径約0.35mの曲物を据える。底部標高32.82m。

井戸SE231 構造の痕跡が認められず、径約0.7mの円形の素掘りの井戸と思われる。底部標高は32.55m。

井戸SE236 SD222に切られた状態で検出。井戸SE231と同様に構造の痕跡が全く認められず、素掘り井戸と思われる。底部標高は32.57m。

井戸SE272 井戸側の痕跡は全く認められなかったが、底部に直径約0.45mの曲物の痕跡を確認。底部標高は32.57m。

井戸SE285 底部に一辺約0.75mの最下段の枠のみが残存していた。方形縦板組みの井戸と考えられる。底部はほぼ平坦で、曲物などの施設はなかった。底部標高は33.18m。

溝SD100 朱雀大路西側溝。幅約4.0m、深さ0.7m。調査区北端から南端まで約90mを検出した。遺物は少ないが、鎌倉時代前期の土器類が出土した。

溝SD043 幅約1.5m。深さ0.2mの東西溝。検出延長24m。東は朱雀大路西側溝の手前で途切れる。近世の耕作などにより上部は削平されている。

溝SD222 幅2.5m。深さ0.7~0.8mの東西溝。検出延長23m。東は朱雀大路西側溝の手前で途切れる。SD255と接続するが、その西側2.5m程の区間が浅くなっている。

溝SD142 幅1.8m。深さ0.4mの東西溝。検出延長17m。SD222の北14mに位置する。東は朱雀大路西側溝の手前で途切れる。SD255と接続するあたりが土手状に高まっている。

溝SD255 SD222・SD142と接続する南北溝。幅2m。深さ0.5~0.6m。検出延長14m。

以上4つの溝群は遺物からみてほぼ同時期に属し、断面の形状の共通性や、南北方向のSD255を除いた3条がともに朱雀大路西側溝の手前で途切れているなどの点から一連の施設の可能性が高い。SD255はSD142とSD222を接続する位置にあるが、SD142と接するあたりが土手状に高まっている。またSD222もSD255との接続部の西側約2.5mほどの区間が浅くなっているなどの点か

ら単なる導水施設とはとらえられない。堆積土も粘質のシルトが主体で水が流れていたというよりむしろ常時滞水していた状態を示しており、敷地を区画する濠状の施設かと思われる。

(5) 近世末期から近代の遺構

建物SB001 南北1間×東西3間で、柱間は南北4.0m、東西2.0m。

建物SB002 南北7間×東西1間。柱間南北2.0m、東西4.0m。

溝SD010 幅約2.0mの南北溝。後に両岸に板で護岸を施し、幅約0.9mに改修されている。この溝は慶応四年の地図にも記載があり、調査区の南約100mに現在も流れている西高瀬川に合流していたが、二条駅建設に廃絶したと思われる。

土壌SX011 板で護岸された一辺約4m四方の土壌で、北西部が一段深くなっている。北西の隅にSD010から導水していた痕跡が確認でき、なんらかの水利施設かと思われる。これら近世末から近代の遺構は北が大きく東にふれる方位をもつ。

表2 遺構一覧表

時代	主な遺構	概要	
弥生時代?～	流路SX300	旧流路 弥生土器を含む 堆積の一部に火山灰を含む	
平安時代前期	建物SB005	南北1間×東西1間 井戸SE219に関連するものか	
	建物SB007	南北3間 東柱列のみ確認 柱間2.7m等間	
	井戸SE099	上層に土器・瓦などが堆積 構造不明 9世紀後半	
	井戸SE219	位置は三町南北中央付近 構造不明 底部曲物 9世紀後半	
	井戸SE150	蒸籠組2段確認 底部曲物 10世紀 土師器など	
	溝SD101	三町東側内溝 9世紀前半の遺物含む	
	溝SD234	三町南北中央付近に位置する東西溝	
	瓦落ちSX237	築地両側に検出 多量の瓦が出土	
	柱列SA008	三町東築地推定位置に南北に並ぶ	
	整地層SX283	SX300上部の湿地を整地したもの 数度にわたる整地層	
	平安時代末期 ～鎌倉時代	建物SB003	南北3間×東西2間
		建物SB004	南北2間×東西1間 柱間南北2.4m、東西2.7m
建物SB006		南北3間以上×東西2間	
井戸SE200		石組み 底部に曲物	
井戸SE231		素掘り井戸	
井戸SE236		素掘り井戸 溝SD222に切られる	
井戸SE272		素掘りか 底部に径50cmの曲物	
井戸SE285		方形木枠組み 再下段の枠のみ残存	
溝SD100		朱雀大路西側溝	
溝SD043		濠状の溝	
溝SD222		濠状の溝 SD255と接続する	
溝SD142		濠状の溝 SD255と接続する	
溝SD255		濠状の溝	
溝SD267		SB004西側の逆L字形の溝 東西部分がSB004の北にそろう	
近世・近代		建物SB001	南北1間×東西3間 柱間南北4.0m、東西2.0m
	建物SB002	南北7間×東西1間 柱間南北2.0m、東西4.0m	
	溝SD010	南北溝 両岸に板で護岸 二条駅建設時に廃絶	
	土壌SX011 (遊水施設?)	SD010から導水 板で護岸	
	その他耕作関係小溝群多数		

3. 遺物

遺物は整理箱にして412箱出土している。その内容は土器、陶磁器、瓦の他、井戸に使用されていた曲物や箸などの木製品、金属製品（主に銭貨）、石製品である。

(1) 瓦類

瓦類は主に築地の瓦落ちSX237、整地層SX283、朱雀大路西側溝SD100から出土しており、丸・平瓦のほか軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦の他「栗」銘の文字瓦や緑釉瓦がある。平安時代前半のものと平安時代後期に属するものがあるほか、平城京で使用されていた再利用瓦もある。以下、主要な瓦について述べる。文献は次のように略して記す。『木村』（『木村捷三郎収集瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年）、『平古』（平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1977年）、軒平瓦（図版7 図13）

瓦1 外向唐草紋である。中心飾りは上向C字形で、唐草紋は両側に3回反転する。段顎。瓦当部凹面横ケズリ・顎部凸面・裏面ヨコナデ、平瓦凹面布目・凸面横縄叩きである。西賀茂窯産。平安時代前期。『木村』204と同範である。SD010出土。

瓦2・3 外向唐草紋である。中心飾りは上向C字形に山形を配し、唐草紋は両側に3回反転する。外区珠文帯に「×」文を配す。曲線顎。瓦当部凹面横ケズリ・顎部凸面横ナデ、平瓦凹面布目・凸面・側面縦ナデである。平城宮6710A型式。奈良時代後期。2がSX207、3がSE150出土。

瓦4 外向唐草紋である。中心飾りは上向C字形で、唐草紋は両側に展開する。西賀茂窯産。平安時代前期。『平古』333と同紋である。近代溝出土。

瓦5 瓦当左上部の小片であるが、2・3と同様に平城宮6710A型式の軒平瓦かと思われる。SK268出土。

瓦6 外向唐草紋である。唐草紋は中心から両側に展開し、上下に巻き込む。段顎。瓦当部凹面横ケズリ・顎部凸面横ケズリ・裏面縦ケズリ、平瓦凹面布目・凸面オサエ後ナデ・側面縦ナデである。奈良時代。SD100出土。

瓦7 外向唐草紋である。中心飾りは上向C字形で、唐草紋は両側に2回反転する。段顎。瓦当部包み込み成形。瓦当部凹面・顎部凸面・裏面横ナデ、平瓦凹面布目・凸面・側面縦ナデである。播磨産。平安時代後期。SE272出土。

瓦8 外向唐草紋である。中心飾りは上向C字形で、唐草紋は両側に2回反転する。段顎。瓦当部包み込み成形。瓦当部凹面・顎部凸面・裏面横ナデである。播磨産。平安時代後期。SE272出土。

瓦9 半裁花紋である。中心は棒で、花紋は両側に上下交互に3単位配す。段顎。瓦当部成形は折曲技法。瓦当部凹面布目・顎部凸面ナデ・裏面縄叩き、平瓦凹面布目・凸面縄叩きである。山城産。平安時代後期。SK268出土。

瓦10 外向唐草紋である。中心飾りは下向C字形2個で、唐草紋は両側に展開。直線顎。瓦当部凹面ナデである。大和産。平安時代中期。SD100出土。

軒丸瓦(図版8 図13)

瓦11 単弁8弁蓮華紋である。中房は圈線が廻り、蓮弁は盛り上がる。瓦当部裏面上部に浅い溝を付け丸瓦を挿入して、粘土を付加して接合。瓦当面に濃緑色緑釉を厚く施す。平安時代前期。『平古』49と同範である。SX283出土。

瓦12 単弁蓮華紋である。中房は凹み、蓮弁は細長く互いに接する。瓦当部裏面上端に丸瓦を当てて接合。瓦当部側面横ナデ・裏面ナデである。平安時代前期。『平古』53と同範である。SX283出土。

瓦13 単弁8弁蓮華紋である。蓮弁は短く、間弁あり。周縁内側外縁に線鋸齒紋あり。瓦当部裏面上部に溝を付け丸瓦を挿入して、粘土を付加して接合。瓦当部側面横ナデ・裏面ナデ。平城宮6314B型式。奈良時代前期。SX283出土。

瓦14 複弁4弁蓮華紋である。中房は盛り上がり、蓮弁は幅広く、間弁は撥形である。瓦当部成形は一本造りである。瓦当部側面ケズリである。栗栖野窯産。平安時代中期。『平古』67と同範である。近世耕土出土。

瓦15 複弁蓮華紋である。中房は圈線が廻り、蓮弁は幅広い。瓦当部成形は一本造りと推定できる。山城産。平安時代中期。『平古』84と同範である。SD100出土。

瓦16 左巻き三巴紋である。頭部は離れ尾部は互いに接して圈線となる。外区珠紋は大きく密である。瓦当部裏面上部に深い溝を付け丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合。瓦当部側面横ナデ・裏面ナデ。播磨産。平安時代後期。SX283上部包含層出土。

瓦17 単弁8弁蓮華紋である。蓮弁は幅広く、端部は返り周縁にかかる。周縁上に圈線あり。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合。瓦当部側面横ナデ・裏面ナデ。讃岐陶邑窯産。平安時代後期。SD100出土。

瓦18 複弁蓮華紋である。中房は盛り上がり、葺が廻る。蓮弁は幅広い。瓦当部裏面上部に溝を付け丸瓦を挿入して、粘土を付加して接合。瓦当部側面横ナデ・裏面ナデ。播磨神出窯産。平安時代後期。SD100出土。

瓦19 複弁蓮華紋である。中房は盛り上がり圈線が廻り、蓮弁は幅広く短い。瓦当部裏面上端に丸瓦を当て粘土を付加して接合。瓦当部側面横ナデ・裏面ナデオサエ。時期不明。SD101出土。

瓦20 複弁蓮華紋である。中房は内区より凹み、蓮弁は幅広く短い。瓦当部側面オサエである。時期不明。SK268出土。

瓦21 複弁蓮華紋。蓮弁は幅広く短い。瓦当部裏面上端に丸瓦を当て接合。時期不明。SX283出土。

文字瓦(図13)

瓦22 平瓦凹面に陽刻「栗」銘を押捺。凸面縦縄叩き・凹面布目である。栗栖野窯産。平安時代前期から中期。SD101出土。

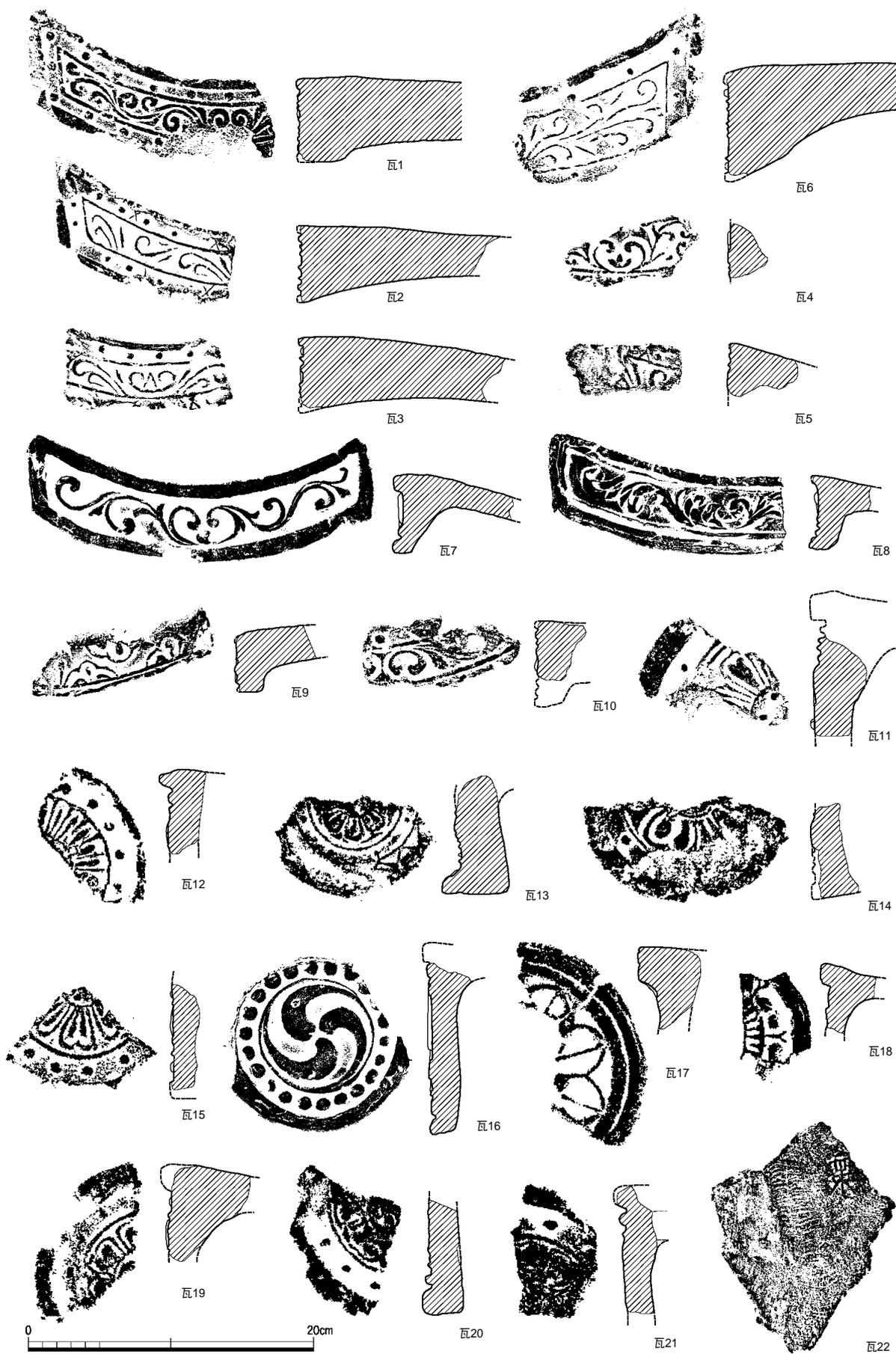


图13 瓦拓影·实测图(1:4)

(2) 土器類

出土した土器類には平安時代前期のほか平安時代末期の土器類、弥生土器、古墳時代の須恵器、近世末から近代の陶磁器類がある。量的には平安時代前期のものが最も多く、平安時代末期のものがそれに次ぐ。弥生土器、古墳時代の須恵器あるいは近世末から近代のものは少量である。

1) 平安時代前期の遺物

平安時代前期の土器類は主に整地層や溝、井戸から出土しているが、集中的に出土したのは整地層SX283で、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器など9世紀から10世紀代の土器類が多量に出土した。このなかに「計」が墨書された須恵器鉢などがある。

整地層SX283出土遺物(図14~18 表3 付表1)

SX283の土器類は総破片数16,961片あり、その内容は土師器74.8%、黒色土器3.5%、須恵器11.3%、緑釉陶器6.4%、白色土器0.2%、灰釉陶器2.7%、輸入陶磁器0.2%、その他1.0%である。機能別に見ると椀皿などの供膳具が多く、供膳具69.3%、貯蔵具6.2%、煮沸具12.6%となっている。供膳具のうちでは土師器が79.9%と大半を占めている。土師器以外の食器類について比率を示せば、黒色土器17.5%、須恵器17.8%、緑釉陶器46.1%、白色土器1.1%、灰釉陶器16.4%、輸入陶磁器1.0%で、緑釉陶器が約半数近くを占めている。土器類の年代は、湿地跡上に繰り返し整地が行われた遺構の性格上、9世紀前半から10世紀前半にかけての幅をもち、明瞭に区分できなかったが、下層ほど古くなる傾向が認められた。

土師器には小片が多く全体を復元できる資料は少ない。土師器皿(1~4)。口径14cm前後の皿A(1~3)や、口径15.8cmでやや後出的な皿L(4)などがある。椀A(5~8)は口径13.5~14.8cmである。杯類には口径17.6cmの杯L(9)のほか杯Aもあるが図示できるようなものはない。杯B(10~14)には外面にヘラケズリをもつ14のようなものもあるが、大多数がナデ調整による。高杯(17~20)は出土量は比較的多いが、杯部から裾部までの全形のわかるものはない。軸部は判明するもののすべてが7面に面取りされている。杯部外面はヘラケズリで、ミガキはない。鉢(21)は外面に粘土紐の接合痕やオサエ痕を残す粗雑な造りである。甕(22~31)は出土量も多く口縁形態のバリエーションも多様だが、形状のわかるものは少ない。口径が20cmを超えるものと10cm台の小型のものがある。

表3 SX283の土器比率表(破片数)

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	杯・椀・皿	9394	74.0%	74.8%
	高杯・盤・鉢	993	7.8%	
	甕・釜・鍋	1963	15.5%	
	その他	15	0.1%	
	不明	329	2.6%	
	小計	12694	100.0%	
黒色土器	杯・椀・皿	414	70.2%	3.5%
	甕	170	28.8%	
	その他	6	1.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	590	100.0%	
須恵器	杯・椀・皿	421	22.0%	11.3%
	壺・瓶	270	14.1%	
	鉢	474	24.8%	
	甕・大型壺	727	38.0%	
	その他	2	0.1%	
	不明	20	1.0%	
	小計	1914	100.0%	
	緑釉陶器	杯・椀・皿	1089	
壺・瓶		1	0.1%	
その他		0	0.0%	
不明		0	0.0%	
小計		1090	100.0%	
白色土器	杯・椀・皿	27	96.4%	0.2%
	高杯	0	0.0%	
	盤	0	0.0%	
	その他	1	3.6%	
	不明	0	0.0%	
	小計	28	100.0%	
灰釉陶器	杯・椀・皿	388	85.7%	2.7%
	壺・瓶	59	13.0%	
	その他	4	0.9%	
	不明	2	0.4%	
	小計	453	100.0%	
輸入陶磁器	杯・椀・皿	23	82.1%	0.2%
	壺・瓶	1	3.6%	
	その他	0	0.0%	
	不明	1	3.6%	
	小計	28	100.0%	
他	その他・不明	164	100.0%	1.0%
総数		16961	100.0%	100.0%

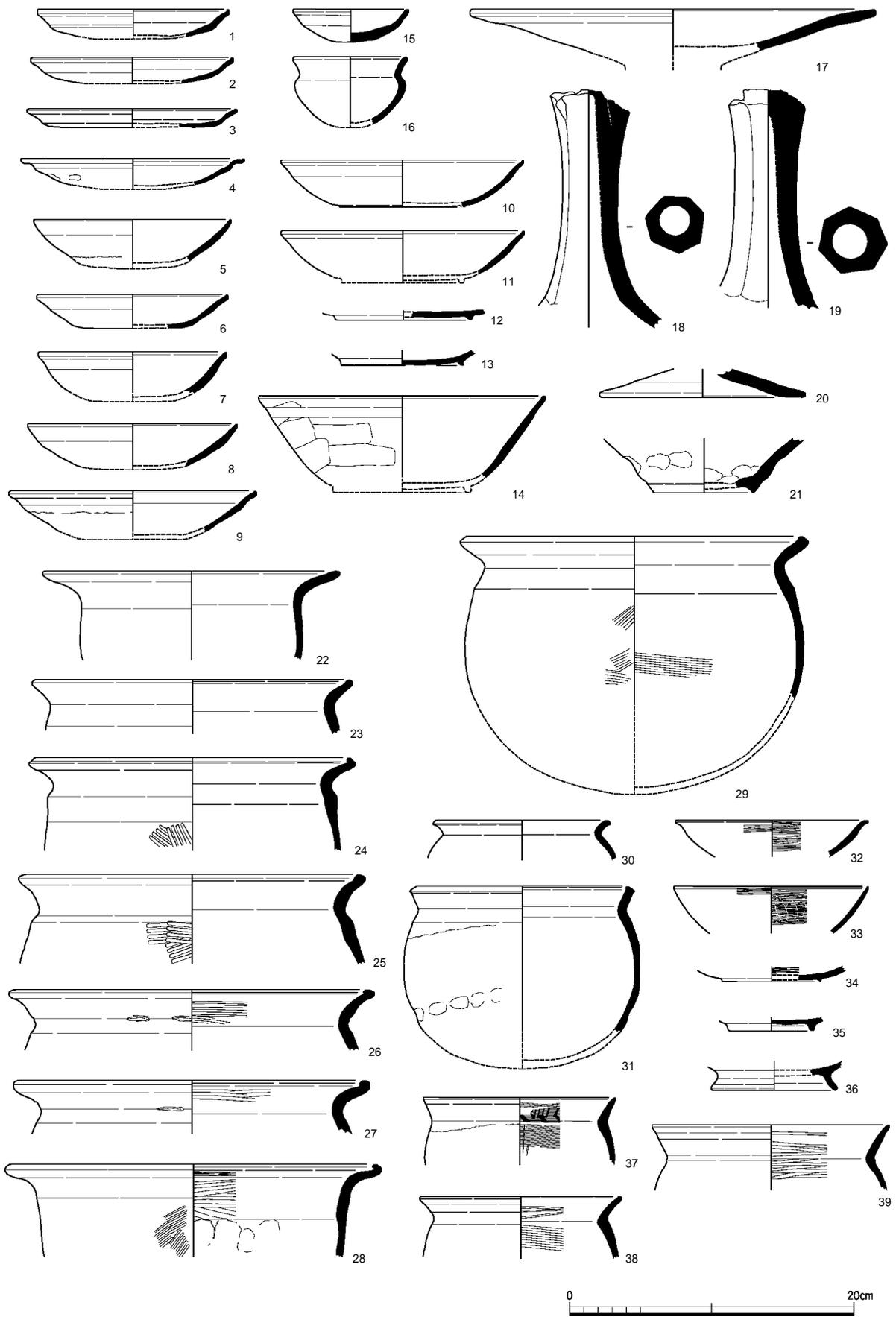


图14 SX283出土土師器・黑色土器実測図(1:4) 土師器:1~31、黑色土器:32~39

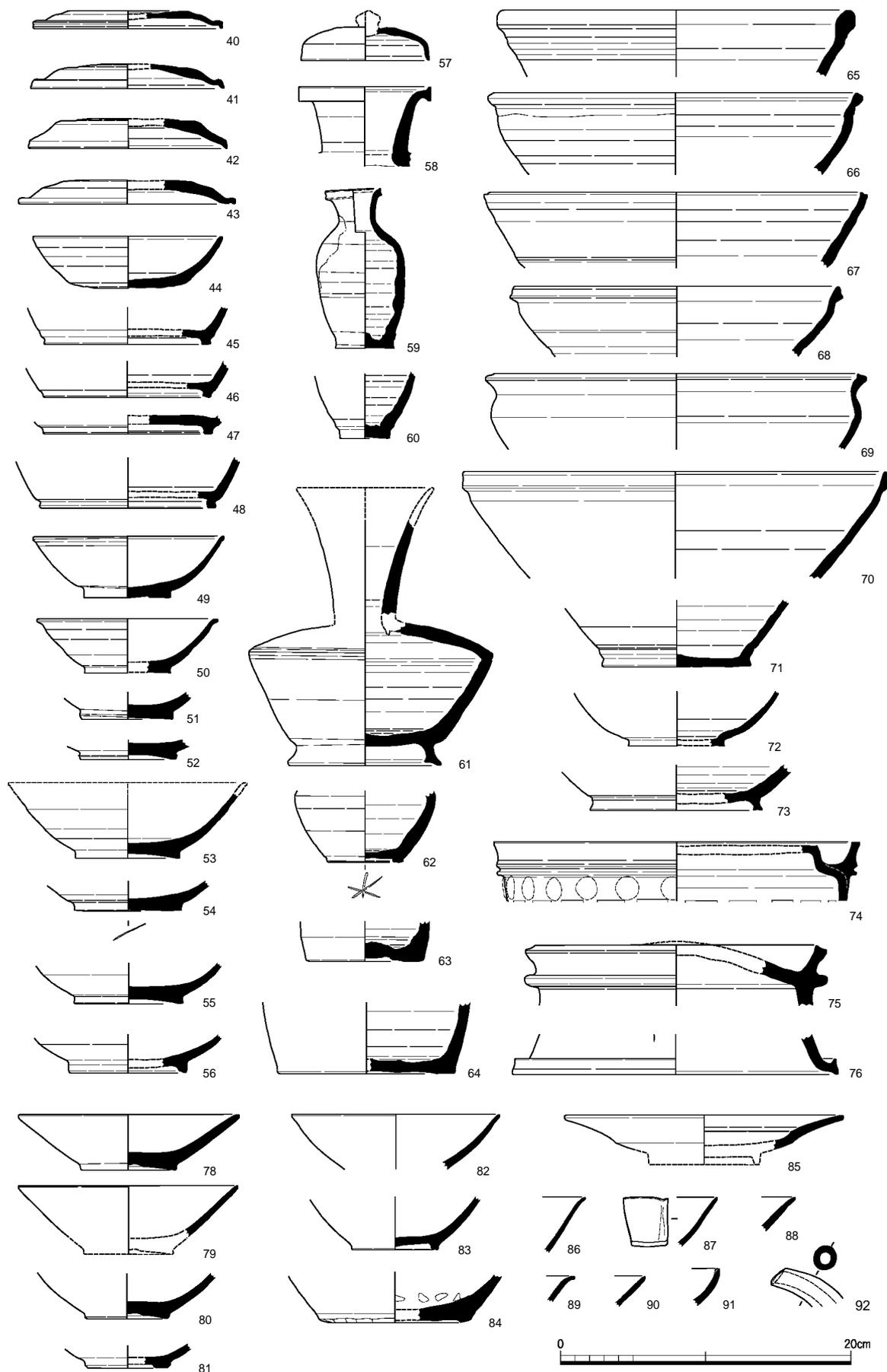


图15 SX283出土須恵器・輸入陶磁器実測図(1:4) 須恵器:40~76、輸入陶磁器:78~92

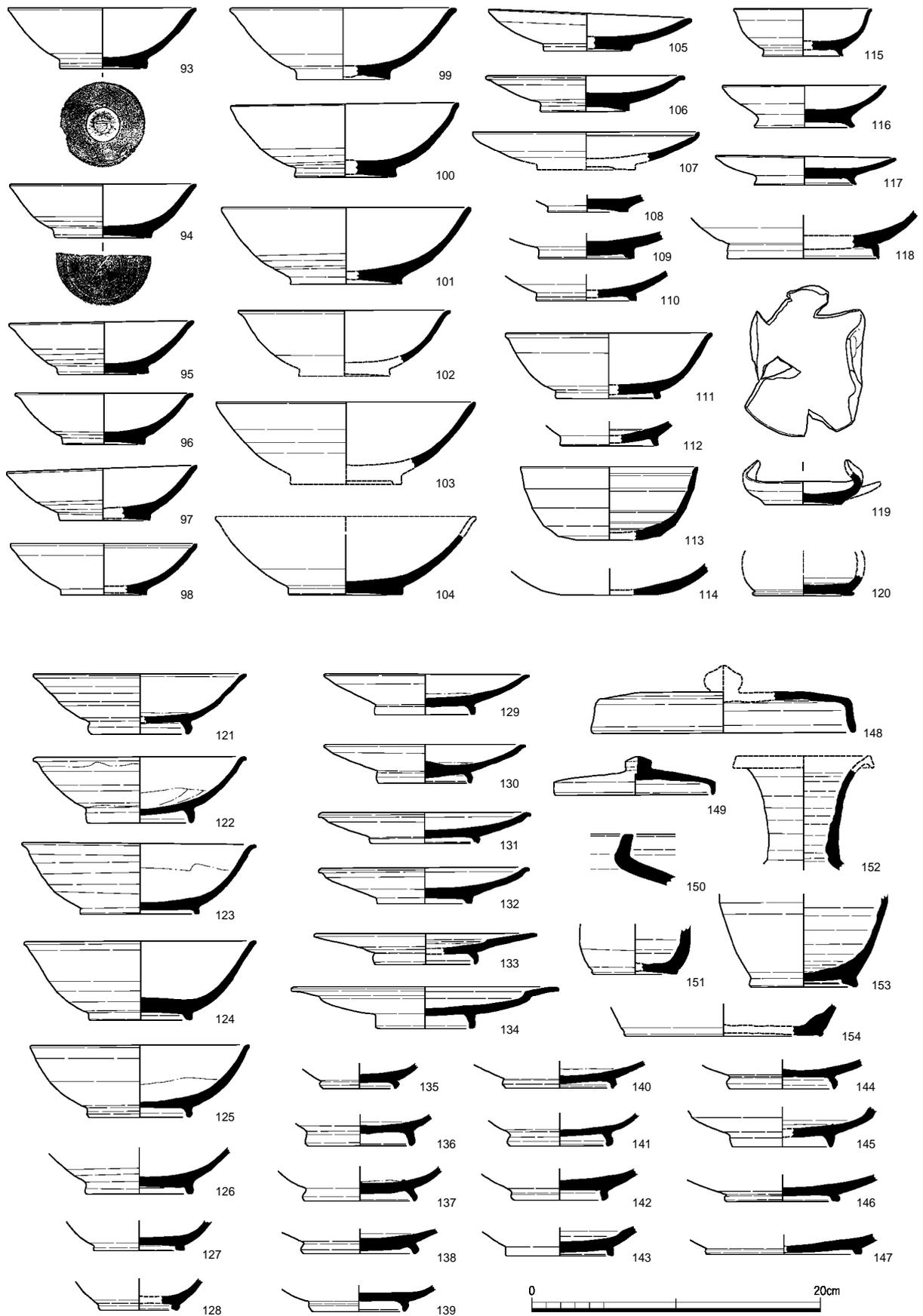


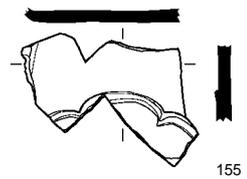
图16 SX283出土綠釉陶器・灰釉陶器実測図(1:4) 綠釉陶器:93~120、灰釉陶器:121~154

黒色土器には椀（32～36）甕（37～39）がある。椀には口縁端部が外反する32のタイプと、外反せず端部を丸くおさめ、内側に沈線が巡るものがある。前者は少ない。また、大半の黒色土器は内面だけを黒色化したものだが、36など両面に黒色処理を施したものが少量ある。甕は外反する口縁端部がすぼまりながら丸くおさまるもの37・39と、上方にわずかに肥厚するもの38がある。いずれのタイプも内面にハケメ調整の後、粗いヘラミガキを施している。

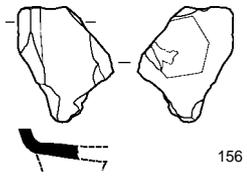


図17 SX283出土
墨書土器（1：2）

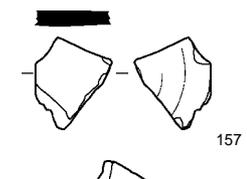
須恵器には杯蓋（40～43）杯A（44）杯B（45～48）椀（49～56）壺蓋（57）壺瓶類（58～64）鉢（65～73・77）硯（74～76・157・158）などがある。蓋を含む杯類には硯に転用された個体が相当数認められる。椀は緑釉陶器と同様の形態のもので、高台形態には円盤状の平高台（50～55）蛇の目高台（49）輪高台（56）がある。いずれも平安京近郊の生産地で製作されたものである。57は短頸壺の蓋。形態、胎土や焼成状態から見て東海系の製品と思われる。59・60は底部に糸切り痕を残す。鉢類の口縁形態にはバリエーションが多い。鉢の体部外面に「計」が墨書されたもの77がある。73は内面が平滑であることから鉢としたが、ロクロナデ痕や形態から見ると壺の可能性もある。硯には74～76の円面硯と157・158の風字硯がある。いずれも硯面は平滑に磨滅しており、よく使用された形跡を示している。



輸入陶磁器には青磁椀（78～80・82～84・86～91）段皿（85）水注（92）白磁椀（81）がある。青磁はすべて越州窯の製品である。78は体部が大きく直線的に開いて口径に対して大きめの蛇の目高台を持ち、一般的な越州窯の蛇の目高台の椀とはやや異なった印象を受ける。85の段皿は猿投産の緑釉陶器・灰釉陶器と近似する形態で、おそらくそれらの祖形であろう。81の白磁椀は邢窯の製品で、高台下端面の釉を掻き落とす。



緑釉陶器には椀（93～104・110～112・115・116・118）皿（105～109・117）杯（113・114）耳皿（119）唾壺（120）がある。椀皿類のうち山城系の製品（93～110・119）は119の耳皿を除いてすべて削り出しの高台をもつ。山城系の椀は大きく口径13cm前後、16cm前後、17～18cm台の3群に分かれる。93・94の底部には「-」のヘラ記号が刻まれている。119の底部外面は糸切り未調整。111～113・120は猿投産の製品。113は無高台の碗形を模した器形だが、内面に5条の沈線を施す。115～118は下端面が内傾する貼り付け高台を持つ。近江あるいは東濃の製品と思われる。



灰釉陶器には椀（121～128）皿（129～132）段皿（133・134・143・145）壺蓋（148・149）壺瓶類（150～154）硯（155・156）がある。また、このほか底部のみの破片で椀皿の判断ができなかったもの

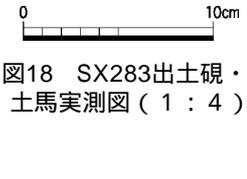
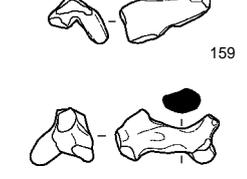
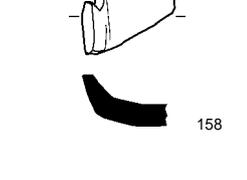


図18 SX283出土硯・
土馬実測図（1：4）

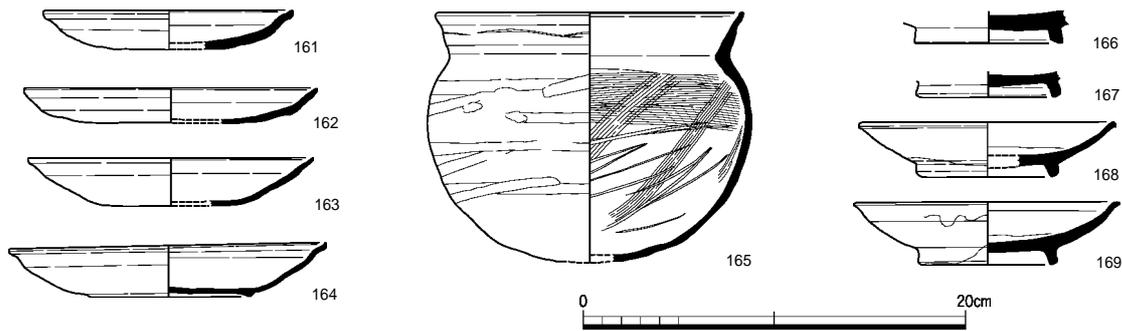


図19 SE099出土土器実測図(1:4)

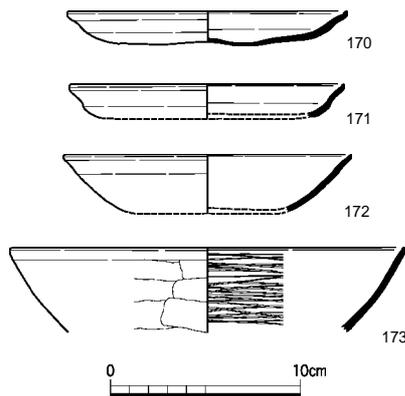


図20 SE219出土土器実測図(1:4)

があるが、高台形態のバリエーションを示すため図示した。148・149は短頸壺の蓋、150は小片であるが大型の短頸壺であろう。151・154は把手付き瓶か。152・153は長頸瓶で、これら壺瓶類は猿投窯の製品と思われる。

その他にミニチュア土器(15・16)と土馬(159・160)などの土製品がある。

先述したようにSX283出土土器群は 期新から 期古までの型式幅を持つ。量的には 期に属するものが圧倒的に多く、 期および 期の資料はわずかであるが、もとより

一括資料として扱えるものではない。しかし、この湿地上に繰り返された整地層からの遺物という観点から見れば、この土器群の持つ時期幅が土地の利用期間を反映したものである可能性は高く、この場所での右京職の活動が 期以降衰退していったことを示しているのではないだろうか。

井戸SE099出土土器(図19 付表2)

土師器皿A(161・162) 杯A(163) 杯B(164) 黒色土器甕(165) 須恵器椀(166) 灰釉陶器皿(167~169) などがある。遺物量は少ないが、土師器や灰釉陶器の型式はまとまっており 期中(9世紀後半)に位置付けられる。

井戸SE219出土土器(図20 付表3)

土師器皿(170・171) 杯A(172) 黒色土器杯(173) などがあるが、 期中の土器類である。ただ、土師器の皿や杯などにSE099のものと比較してやや新しい(期新的)要素がみられる。この井戸はSE099の北方約8 と、比較的近接した位置にあり、SE099が廃絶したあと設置されたものかもしれない。

溝SD234出土土器(図21 付表4)

細片が多く形態の判明する資料が少ないが、土師器のほか緑釉陶器皿(174) 灰釉陶器椀(175) 須恵器鉢(176・177) などがある。概ね 期中に属するが、174の緑釉陶器などやや新しい要素がみられるのはSE219と共通する点である。

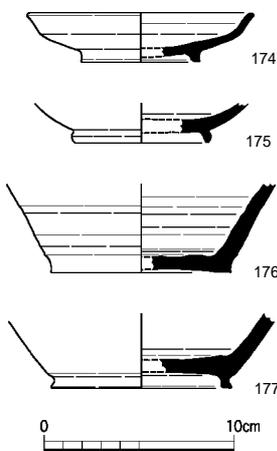


図21 SD234出土土器実測図(1:4)

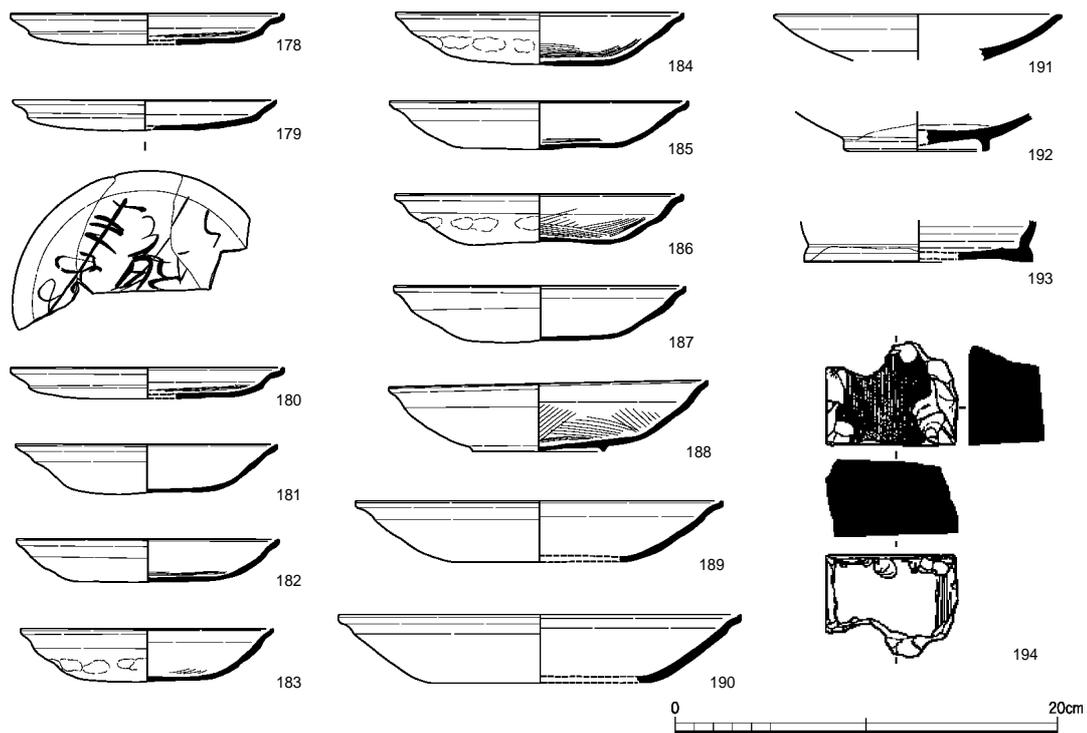


図22 SE150出土土器・石材実測図(1:4)

井戸SE150出土遺物(図22 表4 付表5)

SE150の土器類は総破片数1,179片で、その内容は土師器92.7%、黒色土器1.2%、須恵器3.0%、緑釉陶器2.0%、灰釉陶器1.0%、輸入陶磁器0.1%である。機能別の比率で見ると椀皿などの供膳具が大半を占め、供膳具94.7%、貯蔵具2.0%、煮沸具3.3%となっている。このうちの96.2%が土師器で他の土器類は少量である。土師器以外の食器類の比率を示せば、黒色土器7.3%、須恵器9.8%、緑釉陶器58.5%、灰釉陶器24.4%と施釉陶器の比率が高い。出土総量はあまり多くないが、型的にまとまった 期新に属する資料である。

土師器皿(178・179)は口径14cm前後。口縁部が屈曲し、端部がわずかに上方へ肥厚する。179の底部外面には墨書があるが判読できない。椀(180~183)は口径13.4~13.9cm。口縁部の特徴は皿と類似するが、屈曲がやや緩い。内面にハケメ痕跡の残るものがある。杯A(184~187)は口径15.2~15.8cm。大きさ以外の特徴は椀Aに共通する。杯L(189・190)には口径19.4cmと21.2cmのものがある。全体的な形状は杯Aと同じ。杯B(189)は口径16.8cmで、底部に細く低い高台が付くほかは杯Aと同様の形態的特徴を持つ。内面にはハケメ痕が明瞭に残る。椀・皿・杯類の成形はすべてe手法。

表4 SE150の土器比率表(破片数)

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	杯・椀・皿	1035	94.7%	92.7%
	高杯・盤・鉢	17	1.6%	
	甕・釜・鍋	27	2.5%	
	その他	0	0.0%	
	不明	14	1.3%	
	小計	1093	100.0%	
黒色土器	杯・椀・皿	3	21.4%	1.2%
	甕	11	78.6%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
小計	14	100.0%		
須恵器	杯・椀・皿	4	11.4%	3.0%
	壺・瓶	11	31.4%	
	鉢	12	34.3%	
	甕・大型壺	8	22.9%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
小計	35	100.0%		
緑釉陶器	杯・椀・皿	24	100.0%	2.0%
	壺・瓶	0	0.0%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
小計	24	100.0%		
白色土器	杯・椀・皿	0	—	0.0%
	高杯	0	—	
	盤	0	—	
	その他	0	—	
	不明	0	—	
小計	0	—		
灰釉陶器	杯・椀・皿	10	83.3%	1.0%
	壺・瓶	2	16.7%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
小計	12	100.0%		
輸入陶磁器	杯・椀・皿	0	0.0%	0.1%
	壺・瓶	1	100.0%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
小計	1	100.0%		
他	その他・不明	0	—	0.0%
総数		1179	100.0%	100.0%

灰釉陶器皿（191・192）のうち191は胎土や焼成状態からみて東海系の製品であり灰釉陶器としたが、施釉痕跡は認められない。192には内外面に漬け掛けの施釉痕が確認できる。底部内面が平滑に磨耗し墨痕が残る。黄釉水注（193）は長沙系の製品。残存部は底部のみだが、その形状から水注と推測できる。他に土器ではないが、石製銚具の原材と思われる切断痕跡のある石材（194）が出土している。

2) 平安時代末期の遺物

平安時代末期の遺物は、主に溝SD222・SD255、SB004、SD100などから出土している。総量は多くないが、溝SD222・SD255の土器類は形式的にまとまりのある資料で、残存状態も良好で

表5 SD222・255の土器比率表(破片数)

器種	器形	破片数	比率(%)		
土師器	皿・椀	6135	99.0%	96.2%	
	甕・鍋・釜	46	0.7%		
	炉・火鉢	0	0.0%		
	鉢	1	0.0%		
	その他	0	0.0%		
	不明	14	0.2%		
	小計	6196	100.0%		
瓦器	椀・皿	69	69.0%	1.6%	
	鍋・釜	25	25.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	火舎・火鉢	6	6.0%		
	その他	0	0.0%		
	不明	0	0.0%		
	小計	100	100.0%		
白色土器	杯・椀・皿	12	80.0%	0.2%	
	高杯	3	20.0%		
	盤	0	0.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	その他	0	0.0%		
	小計	15	100.0%		
須恵器・山茶椀	杯・椀・皿	2	2.9%	1.1%	
	鉢	52	76.5%		
	壺・瓶	8	11.8%		
	甕	6	8.8%		
	その他	0	0.0%		
	小計	68	100.0%		
焼締陶器	甕	5	83.3%	0.1%	
	壺	1	16.7%		
	鉢・盤	0	0.0%		
	その他	0	0.0%		
	小計	6	100.0%		
国産施釉陶器	椀・皿	0	-	0.0%	
	鉢	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	その他	0	-		
	小計	0	-		
		0	-		
輸入陶磁器	白磁	椀・皿	38	70.4%	0.8%
		鉢	0	0.0%	
		壺・瓶	8	14.8%	
		その他	0	0.0%	
	青磁	椀・皿	2	3.7%	
		鉢	0	0.0%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		その他	0	0.0%	
	青白磁	椀・皿	2	3.7%	
		鉢	0	0.0%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		その他	2	3.7%	
	その他	椀・皿	0	0.0%	
		盤	0	0.0%	
壺・瓶		1	1.9%		
その他		1	1.9%		
	輸入陶磁器小計	54	100.0%		
他	その他・不明	3	100.0%	0.0%	
総数		6442	100.0%	100.0%	

ある。このふたつの溝の遺物は同一型式（期新）に属し、接合する資料もあるため、まとめて報告する。

SD222・255出土遺物（図版9・10 図23 表5 付表6）

SD222・255の土器類は総破片数6,442片で、その内容は土師器が96.2%を占め、瓦器1.6%、白色土器0.2%、須恵器・山茶椀1.1%、焼締陶器0.1%、輸入陶磁器0.8%とその他の土器類はわずかである。機能別にみると供膳具が98.5%と大半を占め、貯蔵具は0.4%、煮沸具は1.1%と非常に少ない。また供膳具についてみると、土師器が98.0%となり、土師器以外のものはすべて合わせても125片と極端に少ない。土師器を除いた供膳具の比率は、瓦器55.2%、白色土器9.6%、山茶椀1.6%、輸入陶磁器33.6%となり、瓦器について輸入陶磁器が多い。輸入陶磁器の中では白磁が約9割を占める。

土師器皿にはAc（195～197）、N（198～236）がある。皿Acは口径9.0～9.5cm。口縁部を内側に折り曲げた、いわゆるコースター形の皿である。皿Nには口径が8.9～9.8cmの小型品と13.6～14.7cmの大型のものがあり、それぞれの口径群には高/径比が0.16前後の浅いものと0.2を超える深いものがある。量的には前者の比率が高く後者は少ない。

瓦器には皿（237）と椀（238）がある。どちらも内面を粗くミガキ。

須恵器鉢（239・240）、239は高台が剥離した痕跡がある。240は同様の鉢の片口部。胎土や焼成状態が近似するが、別個体である。いずれも東海系の製品。硯（242）は丁寧な造りで焼成状態も良好である。硯面は平滑に磨耗している。

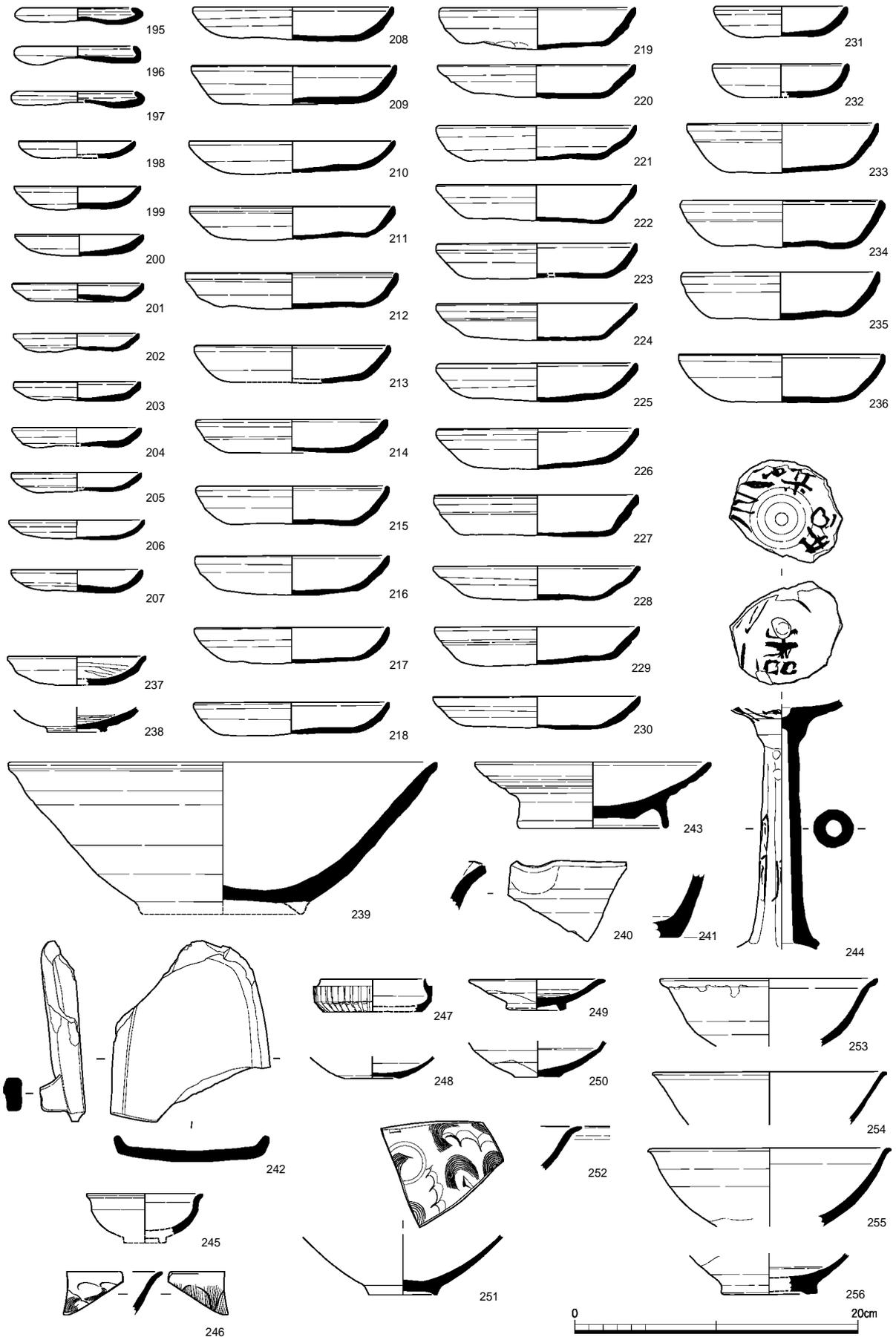


图23 SD222·255出土遺物実測図(1:4)

白色土器には台付き皿（243）と高杯（244）がある。243の底部には糸切り痕が残り、その外側にやや高めの高台を貼り付けている。244の高杯には杯部内外面と軸部に墨書がある。軸部には「月」が3箇所に、杯部の墨書は内面の1文字が「器」と読めそうであるが、他は判読不可。

輸入陶磁器青磁椀（245・246）はいずれも龍泉窯系の製品。245は径8.3cmの小椀。246は口縁部の小片で、内外面に文様を施す。青白磁には合子（247）と皿（248）と椀（251）がある。椀は釉の発色もよく、内面には櫛描き文が密に施文されている。白磁には皿（249・250）、椀（252～256）がある。249の底部内面は輪状に釉が掻き取られている。250は無高台の小皿。釉は失透気味でやや黄色みを帯びる。椀252～255は口縁端部がわずかに外方に広がる。256は高台の削り込みが浅く、底部は厚く、外面の削りは粗い。口縁端部が玉縁状に肥厚するタイプの底部か。

このほか土器類ではないが滑石製鍋（241）の底部片が出土している。

溝SD100出土土器（図24 付表7）

土師器には皿Nの大小（257～260）があるが、小片が多く全体の形状のわかる資料が少ない。形態ほか特徴はSD222・255と近似している。

瓦器羽釜（261・262）、脚部の他体部の小片があるが全形のわかる資料はない。

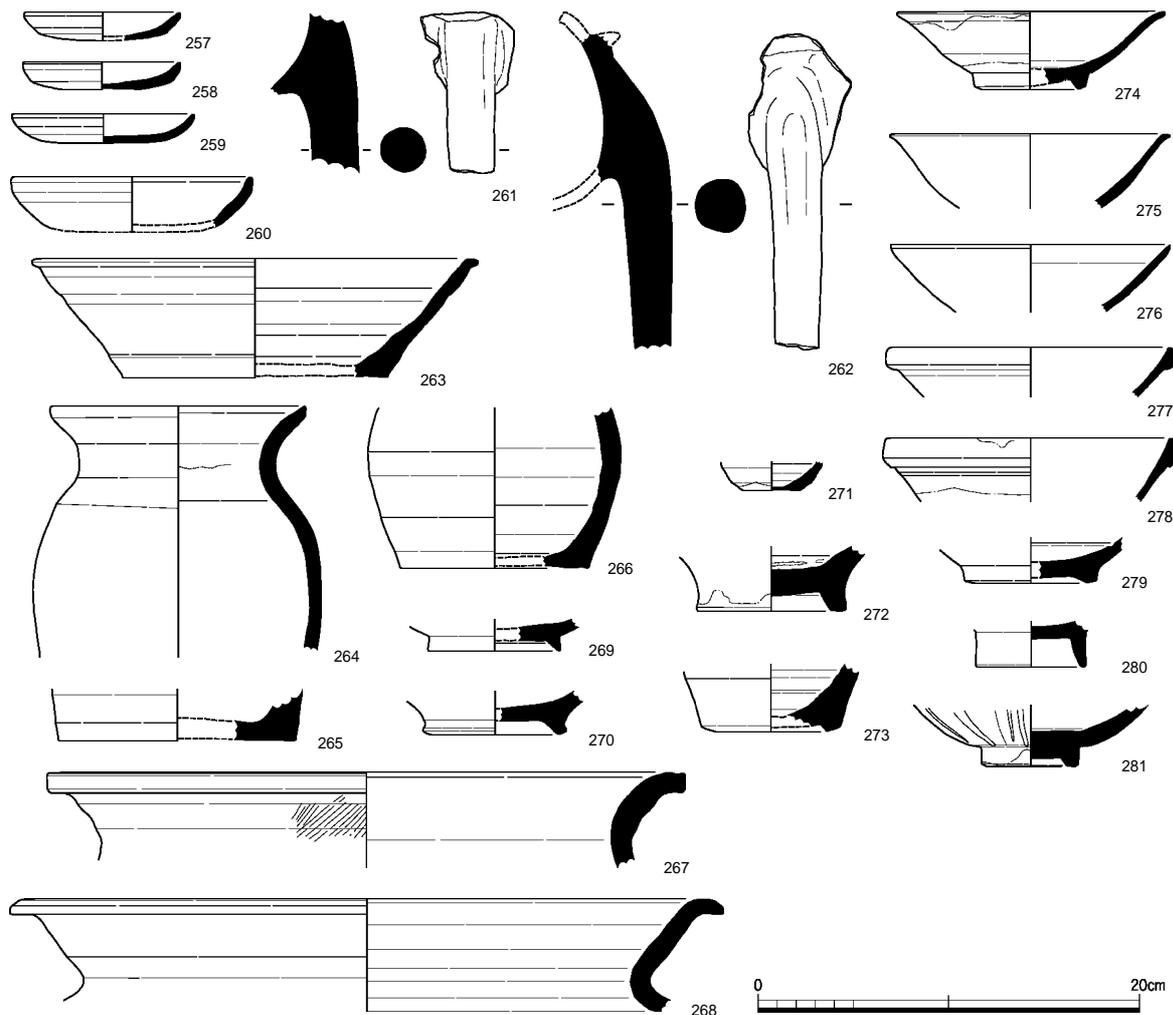


図24 SD100出土土器実測図（1：4）

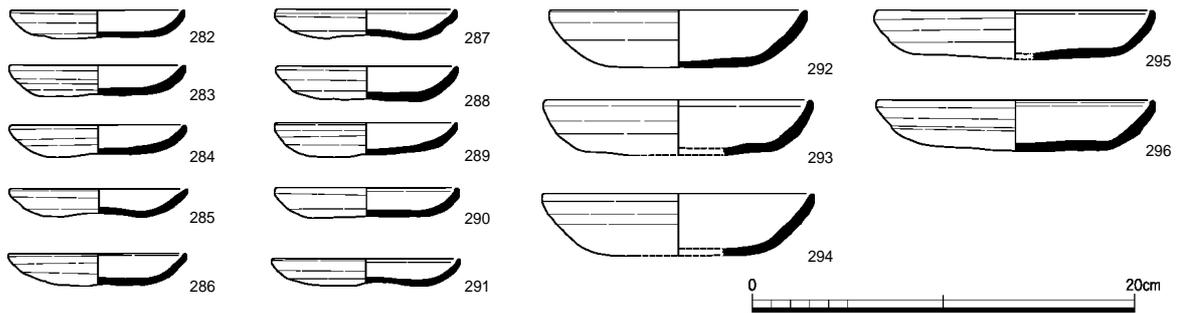


図25 SB004出土土器実測図(1:4)

須恵器鉢(263)は体部が外方に開く浅い器形で、器表にはナデ痕が強く残る。壺264・265は胎土、焼成状態などから東海系の製品かと思われる。直接接合しないが、同一個体の可能性が高い。266は丸みのある体部で、胎土は263の鉢に類似する。須恵器ではあるが、263とともに成形技法や形態に焼締陶器に通ずるものがある。甕267は東播系か。268は生産地不明。どちらも口縁部のみ出土で体部の形態は不明。山茶椀(269・270)は底部のみの破片である。271は白磁の小壺、272は四耳壺あるいは水注の底部。273は褐釉の壺底部である。白磁椀(274~280)には口縁端部がわずかに外方に広がるものと直線的に開くもの、端部が玉縁状に肥厚するものがある。281は外面に鎬蓮弁文を持つ青磁椀。最上層から出土しており、この土器群の中では新しい要素といえる。

建物SB004出土土器(図25 付表8)

土師器皿Nがまとまって出土している。口径は皿N大(292~296)が13.6~15.4cm、皿N小(282~291)が9.0~9.8cmとSD222・255出土土師器に近く、とくに計測資料群の最頻値ではほとんど変わらない。形態の特徴も同様で、これらはほぼ同一時期の資料と考えられる。ただ、SB004資料中にはSD222・255にみられた深いタイプのものは全く含まれていない。

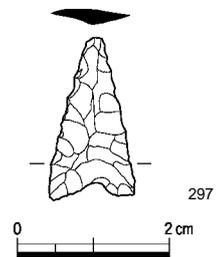


図26 石鏃実測図(1:1)

3) 平安時代以前の遺物(図26・27 付表10)

SX300から出土した弥生土器(壺の体部・底部)の他、平安時代の遺構から縄文時代の石鏃(297)が、SX300付近の包含層から古墳時代の須恵器杯(298)、高杯(299)、甕(300)が出土している。

弥生土器は細片で、器表も磨滅しており、図示し得なかった。

石鏃はサヌカイト製で、表面の風化が激しい。

須恵器杯は底部の破片。口縁部を欠く。高杯は杯部の破片で、立ち上がり部下方に凸帯、杯部下方に凹線、その間に波状文を施す。甕は口縁端部を欠くが、口頸部の中位に凸帯が巡り、その上下に波状文を施す。

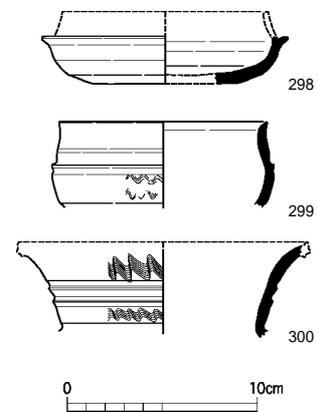


図27 古墳時代の須恵器実測図(1:4)

4) 近世末期から近代の遺物

SD010出土土器(図28 付表9)

陶磁器類が中心であるが少量の土器類もある。溝内埋土上層から出土したものの中には比較的大きな破片もあるが、細片で表面が磨滅し上流から流されてきたとみられるものが多い。これらの遺物には江戸時代末から旧国鉄二条駅開設前後の時期までのものがある。

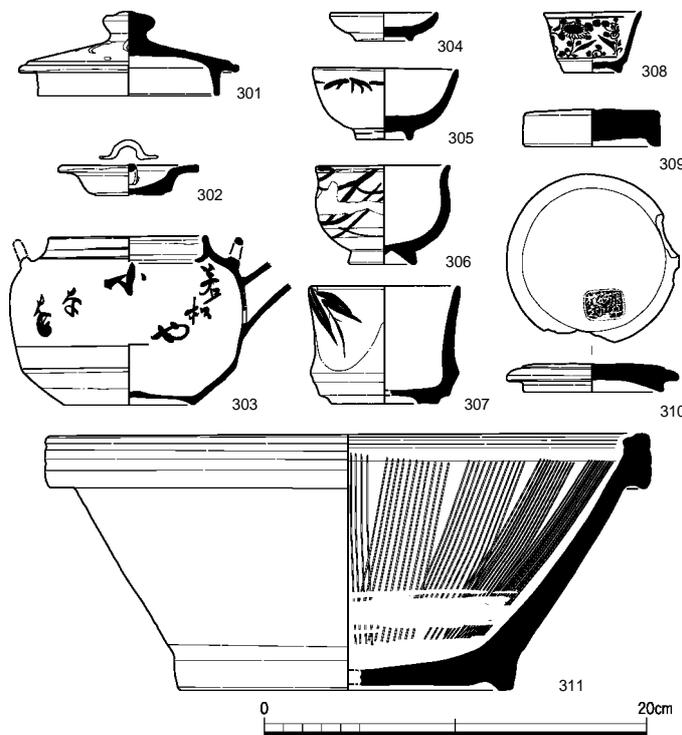


図28 SD010出土土器実測図(1:4)

301は急須の蓋。天井部のつまみを中心に白土のイッチンで、放射状に文様を描く。302・303は汽車土瓶か。303の体部には錆絵で松文、その反対側に「若松や 小なを」と文字が書かれている。304は白磁小皿、305は染付の小椀である。306は内面に白濁釉、露胎の外面に鉄釉と白濁釉で文様をつけている。307は内面と外面口縁部から体部にかけて波状に白化粧を施し、呉須と鉄で葉文を描く。308は赤絵の猪口である。309・310は塩壺の蓋。310の上面には「深草砂川」の刻印が押されている。311は焼締陶器の播鉢である。

表6 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	石鏃	少量	石鏃1点	少量	0箱
弥生時代	弥生土器	少量		少量	0箱
古墳時代	須恵器	少量	須恵器3点	少量	0箱
平安時代前期	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、青磁、白磁、黄釉陶器、硯、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、平瓦、丸瓦、文字瓦、土馬、墨書土器、銚具石材	303箱	土師器51点、黒色土器10点、須恵器38点、緑釉陶器29点、灰釉陶器40点、青磁14点、白磁1点、黄釉陶器1点、硯7点、軒丸瓦8点、軒平瓦7点、文字瓦1点、土馬2点、銚具石材1点	34箱	265箱
平安時代末期	土師器、瓦器、須恵器、山茶碗、白色土器、青磁、白磁、青白磁、褐釉陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、硯、滑石鍋	90箱	土師器61点、瓦器4点、須恵器8点、山茶碗2点、白色土器2点、青磁3点、白磁16点、青白磁3点、褐釉陶器1点、軒丸瓦3点、軒平瓦3点、硯1点、滑石鍋1点	11箱	76箱
近世末期～近代	陶器、焼締陶器、白磁、赤絵、染付磁器、塩壺	16箱	陶器5点、焼締陶器1点、白磁1点、赤絵1点、染付磁器1点、塩壺2点	5箱	10箱
計		409箱	333点(8箱)	50箱	351箱

コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より多くなっている。

4.まとめ

調査地は平安京右京三条一坊三町に該当し、右京職の推定地である。今回の調査に先立つ平成9年度の調査では、その右京職の主要施設とみられる、三町の東西中心に対して対称に配置された大型建物2棟をはじめとする遺構群や、「右籍所」、「計帳所」など右京職の部署名が墨書された土器が出土し、推定を裏付ける成果を上げている。

今回の調査対象となった地域は右京職敷地の東端部と、その東を南北に通る朱雀大路の西側溝および路面の一部である。調査の結果、朱雀大路の西側溝および、右京職に関連する遺構として、井戸3基、掘立柱建物の一部、内溝、築地およびその両側の瓦落ちや整地層などを、その他に平安時代末期の建物、井戸、溝、土壌、近世末から近代の溝や井戸、耕作関係の遺構を検出した。

朱雀大路の西側溝は調査区の北端から南端の約90mにわたって検出したが、その西側の一部には築地の痕跡と、その両側に沿って瓦落ちを確認した。築地心の推定位置付近には南北に並ぶ柱穴列を検出している。大路の路面は近代の溝や耕地により削平されたものと思われ、路肩の一部を確認したのみである。

朱雀大路は、これまで左京六条一坊（旧専売公社敷地内）や右京七条一坊（中央市場敷地内）でも検出しているが、今回は単一の調査区として最も長い範囲を連続的に確認している。側溝の埋没は、出土土器から平安時代末頃と推定できるが、他の事例でも同様の年代が得られており、朱雀大路がこの時期まで機能していたことがうかがえる。

朱雀大路の規模は「延喜式」に、路幅（築地心々）二十八丈（約84m）で、築地基底部の幅五尺、犬行一丈五尺、側溝五尺と記載されているが、検出した溝幅は約4mで記載より広く、逆に築地心から溝肩までの距離は約2mと犬行部の幅は少ない。これが本来の規模であったかは不明だが、右京職関連の遺構・遺物が10世紀中頃以降全く検出されず、周辺が一度荒廃した様子を示しており、平安時代後期に再整備された時点でこの規模になった可能性もある。

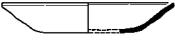
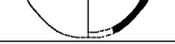
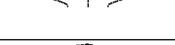
右京職に関連する遺構については、井戸3基、掘立柱建物の一部などがあるが、敷地の縁辺部に当たるためいずれも小規模である。三町東側の内溝は、溝内の埋土に9世紀前半の遺物を含んでいることや、築地の瓦落ちがその上部を覆っていることから、比較的早い段階で廃絶したものと考えられる。旧流路跡の湿地を埋め立てた整地層には9世紀～10世紀前半頃までの遺物が継続的に含まれており、整地が繰り返されていたことはすでに述べたが、その後10世紀後半～12世紀前半までの遺構・遺物がほとんど確認できなかったことは、この整地が行われていた期間が右京職の存続期間であった可能性を示すものかもしれない。

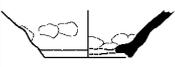
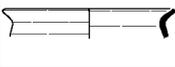
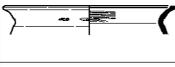
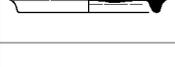
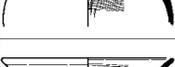
註

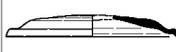
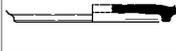
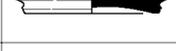
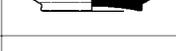
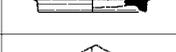
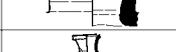
- 1) 出土土器の編年の型式は以下の編年案による。

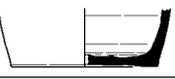
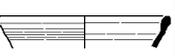
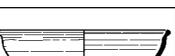
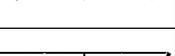
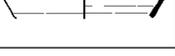
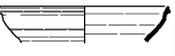
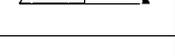
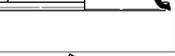
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

付表1 SX283出土遺物一覧表

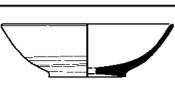
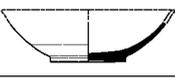
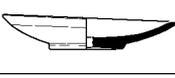
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
1		土師器 皿A	13.6			7.5YR8/3 浅黄橙色	約1/4残存 口縁部外面はナデの境が強い 焼成甘い
2		土師器 皿A	14.4			7.5YR8/3 浅黄橙色	1/8残存 外面底部オサエ 他部位はナデ調整 口縁端部は小さくつまむ 赤褐色粒含む
3		土師器 皿A	14.9	1.3		10YR5/1 褐灰色	小片 黒化している
4		土師器 皿L	15.8			10YR8/2 灰白色	口縁部1/8残存 口縁部はナデによる屈曲強い
5		土師器 碗A	14.0	(3.5)		5YR7/4 にぶい橙色	1/4残存 体部に継ぎ目を残す
6		土師器 碗A	13.5	2.4		7.5YR8/2 灰白色	1/8残存 赤褐色粒・雲母微細粒含む 器表磨滅
7		土師器 碗A	13.4			7.5YR8/3 浅黄橙色	口縁部1/8残存 焼成甘い
8		土師器 碗A	14.8			7.5YR8/2 灰白色	1/4残存 器表磨滅する
9		土師器 杯L	17.6			7.5YR8/4 浅黄橙色	口縁部1/8強残存
10		土師器 杯B	17.2	3.3	8.9	7.5YR8/3 浅黄橙色	口縁部1/8残存 焼成やや甘い 雲母含む わずかに高台が残る
11		土師器 杯B	17.2			7.5YR8/3 浅黄橙色	口縁部1/8残存 外面ケズリ調整
12		土師器 杯B			9.6	10YR8/3 浅黄橙色	底部1/4残存 高台内煤ける
13		土師器 杯B			8.6	10YR7/3 にぶい黄橙色	高台部2/3残存 貼り付け高台 雲母微細粒含む
14		土師器 杯B	20.3			7.5YR8/4 浅黄橙色	口縁部1/8残存 外面ケズリ
15		土師器 ミニチュア鍋	8.2	2.3		7.5YR8/3 浅黄橙色	完形 胎土やや粗 赤褐色粒含む 粗雑なつくり 外面底体部オサエ 他部位はナデ
16		土師器 ミニチュア甕	8.2			7.5YR6/4 にぶい橙色	約1/4残存 胎土やや粗 15と似る
17		土師器 高杯	28.8			7.5YR8/3 浅黄橙色	1/8残存 外面ケズリ 胎土密 赤褐色粒・雲母細含む
18		土師器 高杯				7.5YR8/3 浅黄橙色	脚部はほぼ完形 残存高17.0cm 7面の面取り 上部に軸木の痕跡が認められる 裾部はナデ
19		土師器 高杯				7.5YR8/3 浅黄橙色	脚部はほぼ完形 残存高15.5cm 7面の面取り
20		土師器 高杯			16.6	7.5YR8/2 灰白色	1/4残存 胎土密 赤褐色粒・雲母細含む 器表磨滅する

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
21		土師器 鉢			9.0	7.5YR8/2 灰白色	底部1/4残存 成形・調製は粗雑 強いナデ痕を残す 貼り付け高台
22		土師器 甕	21.0			5YR7/6 橙色	口縁部約5cm 胴部約10cm残存 胎土やや粗砂質 雲母含む ナデ調整
23		土師器 甕	22.6			7.5YR8/3 浅黄橙色	口縁部1/8残存 胎土密 赤褐色粒含む 焼成甘く器表磨滅する
24		土師器 甕	23.1			7.5YR8/2 灰白色	口縁部約6cm残存 胎土密細粒 焼成甘い 体部外面タタキ 内面オサエ 口縁部ナデ
25		土師器 甕	24.6			7.5YR8/2 灰白色	口縁部1/8残存 外面体部タタキ 口縁部ナデ
26		土師器 甕	25.8			7.5YR6/3 にぶい褐色	約8cm残存 胎土やや粗 砂粒多く含む 外面体部タタキ 内面口縁部縁周に沿ったハケメ
27		土師器 甕	25.2			7.5YR6/4 にぶい橙色	小片 胎土粗 砂粒多い 外面体部無文タタキ 口縁部ナデ内面は縁周に沿ったハケメ
28		土師器 甕	26.6			7.5YR8/4 浅黄橙色	口縁部約1/8残存 胴部タタキ 口縁部内面ハケメ調整 端部は内側に折り返される
29		土師器 甕	24.6			7.5YR8/3 浅黄橙色	口縁部1/4残存 胴部最終調整はハケメ 口縁部ナデ
30		土師器 甕	12.6			7.5YR4/1 褐灰色	口縁部1/8残存 胎土細粒砂質 ナデ調整
31		土師器 甕	15.8		16.8	10YR3/1 黒褐色	口縁部約8cm 胴部約13cm残存 胎土砂質 雲母含む 外面体部オサエ 口縁部から内面ナデ 外面煤付着
32		黒色土器 碗	13.6			10YR8/3 浅黄橙色	4cm小片残存 内面のみ黒化 内外面にミガキ A類
33		黒色土器 碗	13.8			7.5YR5/3 にぶい褐色	約6cm残存 内面ミガキ密 暗文あり 外面粗いミガキ A類
34		黒色土器 碗			7.0	7.5YR7/4 にぶい橙色	底部1/8残存 内面ミガキ A類
35		黒色土器 碗			6.0	7.5YR8/3 浅黄橙色	底部約1/2残存 内面のみ黒化 A類
36		黒色土器 碗			8.9	7.5YR2/1 黒色	約5cm残存 内外面ミガキ B類
37		黒色土器 甕	13.6			7.5YR6/3 にぶい褐色	約10cm残存 外面ナデ 内面ハケメ 口縁部に粗いミガキ 外面に継ぎ目を残す
38		黒色土器 甕	14.4			7.5YR6/4 にぶい橙色	約7cm残存 体部内面ハケメ 外面無文タタキ
39		黒色土器 甕	17.0			10YR3/1 黒褐色	小片 内面ミガキ 外面板状のナデ 雲母含む
40		須恵器 杯蓋	13.2	1.3		N6/0 灰色	小片 胎土やや粗

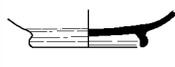
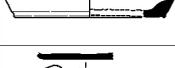
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
41		須恵器 杯蓋	13.4	(1.7)		5Y8/1 灰白色	1/4残存 内面磨耗する 転用硯
42		須恵器 杯蓋	13.8	(2.1)		N8/0 灰白色	約1/4残存 天井部ヘラオコシ後ナデ 転用硯
43		須恵器 杯蓋	15.1	(1.6)		N6/0 灰色	1/4残存 内面磨耗し墨が付着する 転用硯
44		須恵器 杯A	13.1	3.5		7.5Y7/1 灰白色	漆(5YR3/3暗赤褐色)が内面全面と外面に わずかに残る 外面底部に墨書があるが漆 の下面のため判読不能
45		須恵器 杯B			11.5	10Y5/1 灰色	高台部1/8残存 外面焼成によるテリ 高台内磨耗する 転用硯
46		須恵器 杯B			11.6	N6/0 灰色	高台部1/8残存 胎土緻密 焼成良好
47		須恵器 杯B			11.8	N8/0 灰白色	底部1/2残存 胎土やや密 高台内磨耗する 転用硯
48		須恵器 杯B			12.2	N6/0 灰色	高台1/8残存
49		須恵器 椀	13.3	4.3	6.0	N6/0 灰色	底部完形 口縁部1/4残存 ケズリ出しの蛇の目高台 内面底部に密なミガキ 焼成良好
50		須恵器 椀	12.6	3.7	6.0	10YR8/1 灰白色	底部1/4残存
51		須恵器 椀			6.4	N7/0 灰白色	底部完形 内外面ミガキ 重ね焼き痕残る
52		須恵器 椀			6.5	5Y8/2 灰白色	底部1/2残存 焼成やや甘い ケズリ出しの円盤高台 内面ミガキ密
53		須恵器 椀			7.2	N6/0 灰色	底部1/4残存 胎土緻密 焼成良好硬質 ケズリ出しの円盤高台を持つ縁軸形椀 重ね焼き痕あり ミガキ内外面
54		須恵器 椀			7.4	N8/0 灰白色	底部1/2残存 胎土やや砂質 焼成良好 内外面ミガキ 底部にヘラ記号あり
55		須恵器 椀			7.6	7.5Y7/1 灰白色	底部1/4残存 胎土緻密 焼成良好 内外面ミガキ密 平滑 ケズリ出しの円盤高台
56		須恵器 椀			8.1	N6/0 灰色	底部約1/5残存 胎土緻密 焼成良好 ケズリ出しの輪高台 内外面ミガキ
57		須恵器 壺蓋	9.0			5Y6/1 灰色	約1/4残存 胎土やや粗 天井部に別のものを伏せ焼き
58		須恵器 壺	9.1			N7/0 灰白色	頸部1/2残存 胎土緻密 頸部の接合痕が認められる
59		須恵器 壺			4.0	7.5Y8/1 灰白色	8割残存 口縁部から底部にかけて一方向 ビードロがかかる 火膨れ多い 外面底部糸切り未調整
60		須恵器 壺			3.5	10Y6/1 灰色	底部完形 体部少々残存 焼成甘く軟質 外面底部糸切り未調整

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
61		須恵器 長頸壺		(19.2)	10.7	7.5Y6/1 灰色	底部完形 他1/3程残存 胎土緻密 天井部降灰多い 天井部と頸部の接合は一度塞いだ後穴を開け頸部をつける
62		須恵器 壺			5.3	5PB7/1 明青灰色	底部～体部3/4残存 胎土緻密 外面底部にヘラ記号あり
63		須恵器 壺			8.1	5B5/1 青灰色	底部1/2残存 胎土砂粒多い 焼成良 硬質 外面底部ヘラオコシ
64		須恵器 壺			12.2	10Y7/1 灰白色	底部1/4残存 胎土緻密 外面底部ヘラオコシ後ナデ 稲藁の痕が残る
65		須恵器 鉢	24.8			5Y7/1 灰白色	約5cm残存 胎土密だが大粒砂粒をかむ
66		須恵器 鉢	26.0			7.5Y5/1 灰色	約6cm残存 焼成良 硬質
67		須恵器 鉢	26.5			5Y7/1 灰白色	約7cm残存
68		須恵器 鉢	23.0			N6/0 灰色	約8cm残存 胎土密 焼成甘く軟質 口縁端部折り返し
69		須恵器 鉢	26.4			N6/0 灰色	約8cm残存 胎土密 焼成良好
70		須恵器 鉢	29.4			7.5Y8/1 灰白色	約7cm残存 焼成甘く軟質 口縁端部は折り返し
71		須恵器 鉢			10.3	10Y5/1 灰色	底部約4/5残存 焼成甘く軟質
72		須恵器 鉢			6.6	7.5Y7/1 灰白色	底部1/8残存 底部糸切り
73		須恵器 鉢			11.9	5Y5/1 灰色	底部1/4残存 赤紫色の断面色を器表色が挟む 胎土やや粗
74		須恵器 円面碗	25.4			N8/0 灰白色	陸部の周縁に溝状の深い海を持つ 外堤下端に2条の凸帯を巡らす 圈台付け根に円形珠文の外れた痕が残る
75		須恵器 円面碗	20.8			5P7/1 明紫灰色	高い外堤を持ち下端に丸味を持った断面の凸帯を持つ
76		須恵器 円面碗			22.6	5PB6/1 青灰色	約4cm残存 圈台下端部 透かしに沿ったと思えるヘラ書きの直線が残る
77		須恵器 鉢				7.5Y7/1 灰白色	体部外面に「計」の墨書 焼成やや軟質
78		越州窯青磁 椀	15.4	3.9		N8/0 灰白色	底部完形 口縁部1/8残存 胎土非常に緻密 高台底面以外を厚く均一に施釉 底部に6つのメアト
79		越州窯青磁 椀	15.0			7.5Y8/1 灰白色	口縁部1/12(約4.5cm大の小片)残存
80		越州窯青磁 椀			5.6	N8/0 灰白色	底部1/8欠損 体部1/3残存 胎土緻密 全面施釉後高台底面の釉を掻き取り 底部に7つのメアト

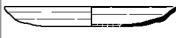
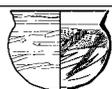
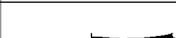
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
81		輸入白磁 碗			6.0	白色	小片 外面底部施釉せず
82		越州窯青磁 碗	14.4			N8/0 灰白色	口縁部約4cm残存
83		越州窯青磁 碗			6.0	7.5Y8/1 灰白色	底部1/8強残存 全釉 高台底面にメアト
84		越州窯青磁 碗			10.6	N8/0 灰白色	底部約1/8残存 全釉 内外面にメアト
85		越州窯青磁 段皿	19.3			N8/0 灰白色	口縁部1/8残存 胎土緻密 釉均一 内面段の角部分が突出する
86		越州窯青磁 碗				N8/0 灰白色	口縁部約2cm残存
87		越州窯青磁 碗				7.5Y8/1 灰白色	口縁部約3cm残存 輪花
88		越州窯青磁 碗				N8/0 灰白色	口縁部約3cm残存
89		越州窯青磁 碗				N8/0 灰白色	口縁部約2cm残存
90		越州窯青磁 碗				N8/0 灰白色	口縁部約5cm残存
91		越州窯青磁 碗				N8/0 灰白色	口縁部約3cm残存
92		越州窯青磁 水注				N8/0 灰白色	注口部分のみ約5cm残存
93		緑釉陶器 碗	13.2	4.2		5Y6/4 オリーブ黄色	底部完形 口縁部1/2残存 胎土緻密 中央部に一文字のヘラ記号 全面ミガキ 全面施釉 底部 I Ba 山城産
94		緑釉陶器 碗	13.0	3.8		7.5Y6/3 オリーブ黄色	中央部に一文字のヘラ記号 全面ミガキ 全面にごく薄く刷毛塗り施釉 一次焼成の重ね痕あり 底部 I A 山城産
95		緑釉陶器 碗	12.8	3.8		7.5Y6/3 オリーブ黄色	底部1/2 口縁部1/4以上残存 94とほぼ同じ ヘラ記号なし 山城産
96		緑釉陶器 碗	12.4	3.6		7.5Y5/3 灰オリーブ色	底部約1/2 口縁部1/8以上残存 94・95とほぼ同じ 山城産
97		緑釉陶器 碗	13.3	3.8		7.5Y6/3 オリーブ黄色	底部1/4 口縁部1/8残存 94・95・96とほぼ同じ 一次重ね痕あり 山城産
98		緑釉陶器 碗	13.0	3.6		2.5Y8/3 淡黄色	底部1/4 口縁部1/8残存 胎土軟質 全釉均一 内面ミガキ 重ね痕あり 底部 I A 山城産
99		緑釉陶器 碗	15.9	5.0		2.5GY4/1 暗オリーブ灰色	底部1/2 口縁部1/4以上残存 全面ミガキ 全面に薄く刷毛塗り施釉 一次重ね痕あり 底部 I Ba 山城産
100		緑釉陶器 碗	16.0	5.2		7.5Y7/1 灰白色	底部1/2 口縁部1/4残存 全面ミガキ 全面に薄く刷毛塗り施釉 やや軟 一次重ね痕あり 底部 I A 山城産

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
101		緑釉陶器 椀	17.4	5.3		10YR8/2 灰白色	1/4残存 外面ミガキなし 全釉均一だが薄い やや軟質 内面に一次焼成の重ね痕あり 底部ⅠA 山城産
102		緑釉陶器 椀	14.8			7.5Y8/1 灰白色	口縁部約1/2残存 釉は薄く刷毛塗り 内面ミガキ 山城産
103		緑釉陶器 椀	18.1			7.5Y8/2 灰白色	口縁部1/4残存 釉は刷毛塗り やや軟質 外面ミガキ 山城産
104		緑釉陶器 椀	(9.0)	(5.0)	7.9	7.5Y8/2 灰白色	底部完形 全釉厚め 剥離 軟質 内面ミガキ 底部ⅠA 山城産
105		緑釉陶器 皿	13.8	2.8		7.5Y7/2 灰白色	ケズリ出し円盤高台 口縁部までケズリ 内外面ミガキ粗 全面薄く刷毛塗り施釉 一次重ね痕あり 底部ⅠA 山城産
106		緑釉陶器 皿	13.9	2.5		N8/0 灰白色	底部完形 口縁部1/4残存 口縁部までケズリ 内外面ミガキ 全面薄く刷毛塗り施釉 底部ⅠA 山城産
107		緑釉陶器 皿	15.8			7.5Y8/2 灰白色	口縁部約7cm残存 軟質 山城産
108		緑釉陶器 皿			5.6	7.5Y7/1 灰白色	底部約1/2残存 底部糸切り残シミガキ 全面施釉非常に薄い 底部ⅠA 山城産
109		緑釉陶器 皿			6.7	N7/0 灰白色	底部1/2残存 内外面粗いミガキ 全面に刷毛塗り施釉 一次焼成の重ね痕あり ケズリ出し輪高台ⅠBb 山城産
110		緑釉陶器 椀			7.0	7.5Y8/2 灰白色	底部1/3残存 内面ミガキ 全釉薄い 一次焼成の重ね痕あり ケズリ出し輪高台ⅠBb 山城産
111		緑釉陶器 椀	14.4	4.6		10Y8/1 灰白色	底部1/4 口縁部1/8残存 全体に丁寧に磨く 全釉均質やや厚 内面高台内にメアト 底部ⅡBb1 猿投産
112		緑釉陶器 椀			7.0	7.5Y8/1 灰白色	体部1/4残存 全釉で厚く均一 外面高台内メアト 内外面ミガキ 底部ⅡBb4 猿投産
113		緑釉陶器 杯	12.4	(5.1)		7.5Y8/1 灰白色	約5cm残存 全体に厚く施釉 内面に沈線を入れる 底部ⅠC 猿投産か？
114		緑釉陶器 杯			6.6	7.5Y8/2 灰白色	小片 全釉均一 厚めに施釉 外面にメアト 内外面にミガキ 底部ⅠC 猿投産
115		緑釉陶器 椀	9.6	3.4		N7/0 灰白色	底部1/2 口縁部1/8残存 硬質 内面にメアト 高台内無釉 底部ⅡBc1 近江産か？
116		緑釉陶器 椀	11.5	3.0		N6/0 灰色	底部ほぼ完形 口縁部1/8残存 高台内端 接地気味 全面施釉だが非常に薄い 内面に一次重ね痕あり 底部ⅡBc1 近江？
117		緑釉陶器 皿	12.4	2.1		N6/0 灰色	底部3/4 口縁部1/2残存 全釉やや厚め 内面高台内にメアト 内面に一次重ね痕あり 底部ⅡBc2 美濃・近江？
118		緑釉陶器 椀			10.6	10Y7/1 灰白色	底部1/4残存 全面に厚く施釉 高台内のみ薄い 底部ⅡBc2 近江産か？
119		緑釉陶器 耳皿		(3.1)		10YR8/2 灰白色	全釉ムラあり 軟質 磨滅する 底部糸切り未調整0A 山城産
120		緑釉陶器 唾壺			7.1	7.5Y8/1 灰白色	底部1/4残存 外面厚く内面薄く施釉 貼り付け輪高台ⅡBa 猿投産

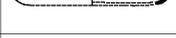
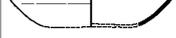
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
121		灰釉陶器 椀	14.8	4.2	7.2	10Y8/1 灰白色	底部約3/4 口縁部1/4残存 内面重ね部以外に灰釉 降灰か施釉しているか不明 底部ⅡBd2
122		灰釉陶器 椀	14.9	4.8	7.5	7.5Y8/1 灰白色	底部完形 口縁部1/4残存 体部口縁部を刷毛塗り施釉 内面底部にひと刷毛のみ施釉 底部ⅡBd2
123		灰釉陶器 椀	16.4	9.0	8.3	7.5Y8/1 灰白色	底部完形 口縁部1/4強残存 内面のみ刷毛塗り施釉 重ね焼きの痕跡なし 底部ⅡBb1
124		灰釉陶器 椀	16.2	5.5	7.2	7.5Y8/1 灰白色	1/5残存 内面に自然降灰 底部ⅡBb1
125		灰釉陶器 椀	15.4	5.0	7.4	10YR8/2 灰白色	1/4残存 内面体部以上を刷毛塗り施釉 底部ⅡBb2
126		灰釉陶器 椀			7.5	10YR8/2 灰白色	底部完形 内面体部に釉残る 内面底部磨耗 高台内糸切り未調整 底部ⅡBb4
127		灰釉陶器 椀			6.3	7.5Y8/1 灰白色	底部1/5残存 内面のみ施釉 調整は丁寧 底部ⅡBb1
128		灰釉陶器 椀			5.6	7.5Y8/1 灰白色	高台部1/4残存 内面のみ施釉 底部ⅡBb1
129		灰釉陶器 皿	14.4	2.9	7.0	7.5Y8/1 灰白色	3/4残存 内面重ね部以外に灰釉 自然降灰か施釉か不明 内面底部・高台底部に重ね焼き痕 底部ⅡBd2
130		灰釉陶器 皿	14.1	2.7	6.5	7.5Y8/1 灰白色	3/4残存 内面重ね部以外に自然降灰 底部に大きな火膨れあり 底部ⅡBd2
131		灰釉陶器 皿	14.8	2.2	7.6	N8/0 灰白色	底部約1/2 口縁部わずかに残存 内面全面に灰釉 施釉方法不明 底部ⅡBb1
132		灰釉陶器 皿	14.7	2.5	6.7	7.5Y8/1 灰白色	約1/2残存 内面のみ施釉 底部ⅡBb1
133		灰釉陶器 段皿	15.6	2.2	7.2	5Y7/1 灰白色	1/4弱残存 内面重ね部以外に自然降灰 高台内に糸切りを残す 底部ⅡBd3
134		灰釉陶器 段皿	18.7	2.9	7.0	10Y7/1 灰白色	1/4残存 内面のみ刷毛塗り施釉 コテにより明瞭な段をなす 底部ⅡBb3
135		灰釉陶器 椀			5.6	7.5Y8/1 灰白色	底部1/2残存 施釉部位不明 底部ⅡBd1
136		灰釉陶器 椀			7.6	7.5Y8/1 灰白色	底部完形 体部の残存わずか 底部以外に施釉 内面底部にひと刷毛施釉 底部ⅡBd2
137		灰釉陶器 椀			8.0	7.5Y8/1 灰白色	底部約1/2残存 内面施釉 底部のみひと刷毛釉を塗る 内面に重ね痕 底部ⅡBd2
138		灰釉陶器 皿			8.2	7.5Y8/1 灰白色	底部1/4残存 外面底部以外を刷毛塗り施釉 内面に重ね痕 底部ⅡBd2
139		灰釉陶器 皿			7.0	7.5Y8/1 灰白色	底部1/2残存 施釉部位不明 右回りケズリ 底部ⅡBd3
140		灰釉陶器 皿			7.9	7.5Y8/1 灰白色	底部1/4残存 内面の底部以外を刷毛塗り施釉 底部ⅡBd2

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
141		灰釉陶器 皿			7.4	7.5Y8/1 灰白色	底部完形 底部の糸切り痕はナデ消し 内面磨耗する 施釉法・部位不明 底部ⅡBd3
142		灰釉陶器 皿			6.8	7.5Y8/1 灰白色	底部1/2残存 内面全釉 胎土やや砂質黒色粒含む 底部ⅡBd3
143		灰釉陶器 段皿			7.6	7.5Y8/1 灰白色	底部1/4残存 内面に厚く施釉 焼成時の 降灰か外面体部テリがあり 高台端面にも 自然釉が付着する 底部ⅡBd1
144		灰釉陶器 皿			7.8	7.5Y8/1 灰白色	底部1/2残存 内面重ね部以外に降灰 重ね痕残る 底部ⅡBd3
145		灰釉陶器 段皿			7.0	7.5Y8/1 灰白色	底部1/4 体部の残存わずか 内面重ね部以外に灰釉 施釉法不明 胎土は白い 底部ⅡBd2
146		灰釉陶器 皿			8.1	7.5Y8/1 灰白色	底部1/2残存 内面全面施釉 底部ⅡBb1
147		灰釉陶器 皿			10.8	7.5Y8/1 灰白色	底部1/4残存 内面にわずかに降灰 重ね焼き痕あり 底部ⅡBb1
148		灰釉陶器 壺蓋	18.5	4.6		10Y8/1 灰白色	1/8強残存 天井部ケズリ 自然降灰
149		灰釉陶器 壺蓋	11.2	2.6		10Y8/1 灰白色	約1/4残存 天井部に自然降灰 胎土精緻
150		灰釉陶器 壺				2.5Y7/2 灰黄色	短頸壺の口縁部 小片のため口径不明 外面たつぶりの降灰を受けビードロ状を呈 する
151		灰釉陶器 壺			5.9	7.5Y8/1 灰白色	底部3/4残存 外面底部糸切り未調整 外面胴部に自然降灰
152		灰釉陶器 壺				7.5Y8/1 灰白色	頸部約1/2残存 内外共に自然釉 頸部の継ぎ足しの様子が認められる
153		灰釉陶器 壺			7.6	7.5Y8/1 灰白色	底部約1/4残存 底部ケズリ後貼り付け高台 自然釉流下し 高台に至る 内面底部に径4～5cmの降灰
154		灰釉陶器 壺			13.9	N8/0 灰白色	底部外周1/4残存 底部の離れ砂に灰を使用したか ケズリ残 し部分の灰が溶けている
155		灰釉陶器 風字硯				7.5Y8/1 灰白色	陸部と海部の境界に粘土紐を山形に貼り付 ける 海部には灰釉を薄く施釉する 底部は降灰を受ける
156		灰釉陶器 風字硯				7.5Y8/1 灰白色	外堤部の破片 底部には脚の外れた痕が残る 外面は降灰を多く受ける
157		須恵器 硯				N7/0 灰白色	外面底部のナデの様子から蓋を転用したも のとも考えられる
158		須恵器 風字硯				N7/0 灰白色	外堤部の破片 外面はケズリで仕上げる
159		土馬				7.5YR8/2 灰黄白色	足・尾をつまみ出した後二つ折りにする
160		土馬				7.5YR7/4 にぶい橙色 断面肌色	胴・尾を紐状に作り足・頭を貼り付ける

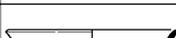
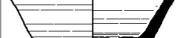
付表2 SE099出土土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
161		土師器 皿A	13.2	2.1		10YR8/3 浅黄橙色	1/4残存 器壁はやや厚手
162		土師器 皿A	15.4	1.8		7.5YR8/3 浅黄橙色	1/4残存
163		土師器 杯A	15.0	2.5		7.5YR8/3 浅黄橙色	1/4残存
164		土師器 杯B	16.8	2.8		10YR7/3 にぶい黄橙色	1/2残存 体底部外面オサエ 口縁部ナデ 端部は小さくつまむ 内面底部ハケメ調整 高台は貼り付け 器壁は薄い
165		黒色土器 甕	16.2	13.3			1/2残存 外面粗いミガキ 内面体・底部 下半粗いミガキ 上半ハケメ 口縁部ナデ 端部は丸くおさめる 外面煤が厚く付着
166		須恵器 碗			7.8	7.5Y8/1 灰白色	内面ミガキ ケズリ出し高台 I Bb
167		灰釉陶器 皿			(7.6)	7.5Y8/1 灰白色	高台部100%残存 内面磨耗する 外面高台際にわずかに釉が認められる 底部 II Bb4
168		灰釉陶器 皿	13.6	2.9	7.5	7.5Y8/1 灰白色	1/8残存 内外面底部以外を施釉 底部 II Bb4
169		灰釉陶器 皿	14.0	3.3	7.4	2.5Y8/1 灰白色	3/4残存 内面に墨が付き磨耗 内外面底 部以外を浸し掛け 内面のみ刷毛塗り補正 中央部に釉が付着 底部 II Bb4

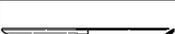
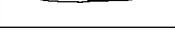
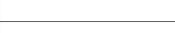
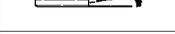
付表3 SE219出土土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
170		土師器 皿A II	14.8	1.8		7.5YR7/6 橙色	ほぼ完形 外面底部オサエ 他部位はナデ 口縁端部 は小さくつまむ 雲母・白色微細粒含む
171		土師器皿 A II	14.5	(1.8)		7.5YR7/4 にぶい橙色	1/8残存
172		土師器 杯A	15.2	(3.1)		7.5YR7/4 にぶい橙色	1/8強残存 胎土は170と似る 口縁端部のつまみは弱い
173		黒色土器 杯	20.8			10YR7/3 にぶい黄橙色	1/8残存 内面は金属光沢を帯びた黒色 内面ミガキ 外面ケズリ 胎土やや密砂質 雲母微細粒多い A類

付表4 SD234出土土器一覧表

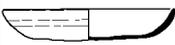
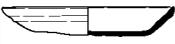
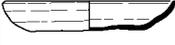
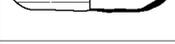
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
174		緑釉陶器 皿	11.9	2.6	6.2	N8/0 灰白色	高台部1/3 体部～口縁部1/8残存 素地須恵質 全面に薄く刷毛塗り施釉
175		灰釉陶器 碗			7.1	7.5Y8/1 灰白色	1/4残存 小片のため施釉部位不明
176		須恵器 鉢			9.5	7.5Y7/1 灰白色	底部約1/2残存 外面底部糸切り未調整
177		須恵器 鉢			9.4	N6/0 灰色	高台部1/4残存 外面底部糸切りナデ消し

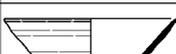
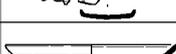
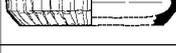
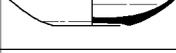
付表5 SE150出土遺物一覧表

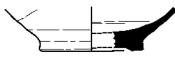
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
178		土師器 皿AⅡ	14.4	1.6		10YR8/2 灰白色	1/4強残存 内面底部ハケメ 口縁部は屈曲し端部は小さくつまみ上げる
179		土師器 皿AⅡ	13.9	1.6		10YR8/1 灰白色	1/2弱残存 外面底部に墨書 内面底部ハケメなし
180		土師器 碗A	13.7	2.8		10YR8/2 灰白色	3/4残存 胎土やや砂質細粒 雲母微細粒含む
181		土師器 碗A	13.9	2.7		10YR8/3 浅黄橙色	口縁部1/2残存 胎土やや砂質 内面に墨付着 内面にハケメ無し
182		土師器 碗A	13.9	2.2		10YR8/1 灰白色	口縁部1/2残存 胎土砂質 細粒
183		土師器 碗A	13.4	2.8		10YR8/2 灰白色	1/4強残存 胎土砂質 細粒
184		土師器 杯A	15.2	2.8		7.5YR7/4 にぶい橙色	1/2強残存 内面底部ハケメ 口縁端部は小さくつまみ上げる 器壁は薄い
185		土師器 杯A	15.8	2.5		10YR8/2 灰白色	1/2弱残存 内面底部ハケメ 口縁端部は小さくつまみ上げる 器壁は薄い 胎土密
186		土師器 杯A	15.2	2.7		10YR8/2 灰白色	口縁部1/4強残存 胎土砂粒多い
187		土師器 杯A	15.3	3.0		10YR6/3 にぶい黄橙色	1/2弱残存 胎土密細粒 雲母微細粒含む ハケメなし
188		土師器 杯B	16.8	3.7	(7.0)	7.5YR8/3 浅黄橙色	e手法 内面底部ハケメ 口縁端部は小さくつまむ 外面底部に細い貼り付けの輪高台がつく
189		土師器 杯L	19.4	3.2		10YR7/2 にぶい黄橙色	1/4強残存 ミガキ痕あり 杯Bか
190		土師器 杯L	21.2	3.6		10YR7/1 灰白色	1/4残存 雲母微細粒多い
191		灰釉陶器 皿	15.2			2.5Y7/1 灰白色	1/8弱残存 内面自然降灰 施釉は認められず
192		灰釉陶器 皿			7.7	7.5Y8/1 灰白色	1/2弱残存 内外面底部以外を浸し掛け施釉 内外面に重ね焼き痕残る 内面底部磨耗し墨跡が残る 底部ⅡBb4
193		長沙窯 黄釉陶器 水注			12.0	5Y8/2 灰白色	底部約1/8残存 内面底部磨耗 外面灰釉施釉 転用硯
194		石材端材				黒色	66×54×40mm残存 4面に石挽き鋸の切断面が残る

付表6 SD222・255出土遺物一覧表

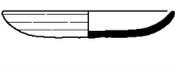
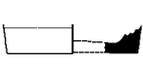
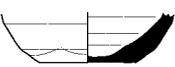
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
195		土師器 皿Ac	9.1	1.2		10YR7/1 灰白色	約1/2残存
196		土師器 皿Ac	9.0	1.3		10YR8/1 灰白色	完形 胎土密 白色細粒含む 焼成良
197		土師器 皿Ac	9.5	1.2		7.5YR8/2 灰白色	1/2以上残存 胎土密 雲母細粒含む
198		土師器 皿N小	8.3	1.2		5YR8/3 淡橙色	小片 器表磨滅する
199		土師器 皿N小	9.0	1.7		7.5YR8/2 灰白色	完形 胎土密 細粒
200		土師器 皿N小	9.2	1.5		10YR7/2 にぶい黄橙色	完形 胎土密 白色粒・雲母含む 焼成甘く器表磨滅する
201		土師器 皿N小	9.3	1.3		7.5YR8/1 灰白色	完形 胎土密 焼成良好
202		土師器 皿N小	8.9	1.3		10YR8/2 灰白色	約1/2残存
203		土師器 皿N小	9.1	1.4		7.5YR8/2 灰白色	ほぼ完形 白色細粒含む
204		土師器 皿N小	9.2	14.0		2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形 口縁煤付着
205		土師器 皿N小	9.3	1.4		7.5YR8/2 灰白色	ほぼ完形
206		土師器 皿N小	9.6	1.4		2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形
207		土師器 皿N小	9.4	1.7		10YR8/2 灰白色	ほぼ完形
208		土師器 皿N大	14.2	2.5		7.5YR8/1 灰白色	ほぼ完形 大粒の白色粒含む 断面一部暗灰色
209		土師器 皿N大	14.5	2.8		10YR8/1 灰白色	7/8残存 胎土密 滑らか 雲母細粒多く含む
210		土師器 皿N大	14.6	2.4		7.5YR8/3 浅黄橙色	約1/2残存 器表激しく磨滅する 調整不明
211		土師器 皿N大	14.6	2.4		7.5YR8/3 浅黄橙色	1/2強残存 胎土やや砂質
212		土師器 皿N大	15.1	2.6		10YR8/2 灰白色	1/2強残存 胎土密 細粒
213		土師器 皿N大	(14.0)	2.6		10YR8/1 灰白色	1/2強残存 器表激しく磨滅する
214		土師器 皿N大	13.6	2.4		7.5YR8/3 浅黄橙色	1/2以上残存 胎土細粒 白色細粒含む 焼成やや甘い

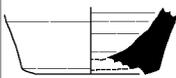
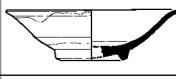
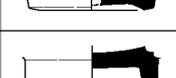
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
215		土師器 皿N大	13.8	2.9		10YR8/1 灰白色	1/2以上残存 胎土密 白色粒含む
216		土師器 皿N大	13.8	2.8		2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形
217		土師器 皿N大	13.9	2.5		2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形
218		土師器 皿N大	14.0	2.4		2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形 胎土やや粗 白色粒大
219		土師器 皿N大	14.0	3.0		10YR8/2 灰白色	1/2残存 白色細粒多い
220		土師器 皿N大	14.1	2.4		7.5YR8/3 浅黄橙色	約3/4残存
221		土師器 皿N大	14.2	2.5		7.5YR8/3 浅黄橙色	約3/4残存
222		土師器 皿N大	14.2	2.8		7.5YR8/2 灰白色	
223		土師器 皿N大	14.3	2.5		7.5YR8/3 浅黄橙色	ほぼ完形
224		土師器 皿N大	14.3	2.6		7.5YR8/3 浅黄橙色	ほぼ完形 胎土やや粗 赤褐色細粒多い 焼成甘い
225		土師器 皿N大	14.3	2.8		7.5YR8/2 灰白色	ほぼ完形
226		土師器 皿N大	14.3	2.9		2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形 雲母含む
227		土師器 皿N大	14.5	3.0		2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形 胎土密 焼成甘い
228		土師器 皿N大	14.6	2.5		2.5Y8/2 灰白色	完形
229		土師器 皿N大	14.6	2.8		2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形
230		土師器 皿N大	14.7	2.4		2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形 白色細粒含む 胎土やや密 焼成良好
231		土師器 皿N小	9.5	2.2		7.5YR8/3 浅黄橙色	1/4残存 雲母含む
232		土師器 皿N小	9.8	2.4		10YR8/2 灰白色	1/2弱残存
233		土師器 皿N大	13.8	2.8		2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形 白色細粒含む なめらか 焼成良好
234		土師器 皿N大	14.6	3.4		2.5Y8/2 灰白色	完形 胎土密 焼良 白色細粒含む 口縁部2段ナデ

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
235		土師器 皿N大	14.3	3.4		10YR8/3 浅黄橙色	ほぼ完形 胎土密 雲母微細粒含む
236		土師器 皿N大	14.6	3.4		7.5YR8/1 灰白色	約1/3残存 胎土密 細粒
237		瓦器 皿	9.8	2.0		N4/0 灰色	1/4残存 内面ミガキ粗い
238		瓦器 椀			4.2	N3/0 暗灰色	底部2/3残存 内面底部一方向の粗いミガキ
239		須恵器 鉢	30.4	10.1		10Y7/1 灰白色	約1/4残存 胎土やや砂質 片口部分なし 高台剥離
240		須恵器 鉢				10Y7/1 灰白色	約8cmの小片 胎土は239に類似する
241		滑石 鍋				N2/0 黒色	小片のため底径不明
242		須恵器 風字椀				N6/0 灰色	1/2以上残存 胎土緻密 焼成堅緻良好 脚の一方を欠く 碗面は使用によって磨耗 底部外面も磨耗 外堤端部はナデ調整
243		白色土器 台付皿?	16.8	4.7	10.5	10YR8/1 灰白色	高台部3/4 口縁部わずかに残存 貼り付けの高い高台がつく 高台内は糸切り 全体に煤が付着する
244		白色土器 高杯				2.5Y8/2 灰白色	脚部完形 残存高約16cm 指痕残し面取り(13面) 杯部・脚部共にナデ調整 全体に墨書あり
245		輸入青磁 小椀 (龍泉窯?)	8.3				約3.5cmの小片
246		輸入青磁 椀 (龍泉窯)	(約15)			白色	約4cmの口縁部小片
247		輸入青白磁 合子	7.5	2.3	7.0	白色	1/8残存 直立する受け部は貼り付け 蓋受け部と外面底部は露胎する
248		輸入青白磁 皿			3.9	白色	底部露胎
249		輸入白磁 皿	9.7	2.3	4.3	N8/0 灰白色	口縁部1/2残存 高台部完形 口縁端部に輪花一方確認 外面底部以外を 施釉後内面底部の釉を輪状に掻き取り
250		輸入白磁 皿			3.2	2.5Y8/1 灰白色	1/2以上残存 底部へら切り 外面底部以上を施釉 口縁部の立ち上がり部分に稜を持つ
251		輸入青白磁 椀			4.8	白色	底部1/2強 体部少々残存 底部露胎 陰刻花文 釉透明 高台内に墨書あり解説不明
252		輸入白磁 椀	(約16)			白色	口縁部小片 貫入多い
253		輸入白磁 椀	15.4			10YR8/2 灰白色	口縁から体部約1/4残存 釉カイヤギ状に縮れる
254		輸入白磁 椀	16.7			白色	口縁から体部約6cm残存 貫入なし

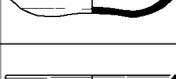
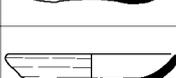
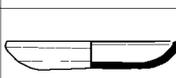
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
255		輸入白磁 椀	17.4			7.5Y8/1 灰白色	口縁～体部約1/4残存 釉の厚い部分発泡 貫入大きい
256		輸入白磁 椀			6.8	7.5Y8/1 灰白色	1/2以下残存 底部のケズリ粗い

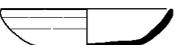
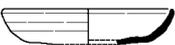
付表7 SD100出土土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
257		土師器 皿N	8.2	1.5		10YR8/1 灰白色	1/4弱残存 胎土密細粒
258		土師器 皿N	8.4	1.5		10YR8/2 灰白色	1/4弱残存 胎土密細粒 赤褐色粒含む
259		土師器 皿N	9.6	1.5		10YR8/2 灰白色	1/4弱残存 胎土密細粒
260		土師器 皿N	12.8	(2.8)		10YR8/2 灰白色	1/4弱残存 粗雑な作りの印象をうける
261		瓦器 羽釜				黒色	残存高8.5cm 脚部ナデ調整
262		瓦器 羽釜				黒色	残存高16.6cm 脚部ナデ調整
263		須恵器 鉢	23.6	6.3	14.0	5Y6/1 灰色	1/8弱残存 底部ケズリ
264		須恵器 壺	13.4			10YR8/1 灰白色	輪積みロクロ整形 胎土やや密 肩部に薄く降灰 底部は265と思われる
265		須恵器 壺			12.6	10YR8/1 灰白色	1/8残存 264の底部と思われる
266		須恵器 壺			10.0	10Y6/1 灰色	底部無調整 胎土やや粗 白色粒含む
267		須恵器 甕	33.6			黒色	1/8強残存 丸く外反する口縁部端部は垂直面をもつ 外面ハケメ 焼成甘い
268		須恵器 甕	37.6			N6/0 灰色	胎土密 外反する口縁部端部は外方に引き出される
269		山茶椀			7.0	7.5Y8/1 灰白色	貼り付け高台 底部に糸切りを残す
270		山茶椀			7.6	7.5Y8/1 灰白色	貼り付け高台
271		輸入白磁 壺			3.0	白色	外面底部ケズリ露胎 内面にはロクロ目が強く残る
272		輸入白磁 壺			7.9	灰白色	外面底部以外を施釉 内面底部にメアト 高台内ケズリ

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
273		輸入褐釉壺			7.4	10Y7/1 灰白色	全釉 釉溶けきらず外面カセている
274		輸入白磁碗	14.2	4.1	6.0	白色	1/4弱残存 外面底部を残して浸け掛け後 内面底部重ね部分を掻き取り 高台ケズリだし
275		輸入白磁碗	(14.8)			白色	口径不安 内面底部との境にわずかに沈線が認められる
276		輸入白磁碗	14.7			灰白色	1/8弱残存 釉は貫入多く外面にピンホールあり
277		輸入白磁碗	15.2			白色	4～5 cmの小片 口縁部折り返し 内面コテあと残る
278		輸入白磁碗	(15.6)			白色	1/8弱残存 口径不安 口縁部折り返し
279		輸入白磁碗			7.0	白色	高台部ケズリ 外面底部以外を施釉 内面体部立ち上がり部分に沈線を巡らす
280		輸入白磁碗			5.8	灰白色	直立する高い高台が付く ケズリ出し 外面底部施釉せず
281		龍泉窯青磁碗			5.2	灰白色	外面底部以外を施釉 シノギ蓮弁は深く明瞭

付表8 SB004出土土器一覧表

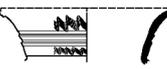
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
282		土師器 皿N小	9.2	1.5		2.5Y8/4 淡黄色	ほぼ完形
283		土師器 皿N小	9.2	1.6		10YR8/4 浅黄橙色	完形
284		土師器 皿N小	9.3	1.7		10YR8/3 浅黄橙色	ほぼ完形
285		土師器 皿N小	9.4	1.6		2.5Y8/4 淡黄色	ほぼ完形
286		土師器 皿N小	9.4	1.7		10YR8/3 浅黄橙色	完形
287		土師器 皿N小	9.6	1.6		10YR8/3 浅黄橙色	ほぼ完形
288		土師器 皿N小	9.6	1.8		10YR8/3 浅黄橙色	完形
289		土師器 皿N小	9.6	1.8		10YR8/3 浅黄橙色	ほぼ完形
290		土師器 皿N小	9.7	1.6		10YR8/3 浅黄橙色	ほぼ完形

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
291		土師器 皿N小	10.0	1.5		10YR8/4 浅黄橙色	完形
292		土師器 皿N大	13.6	3.0		10YR8/3 浅黄橙色	1/4強残存
293		土師器 皿N大	14.2	2.9		10YR8/3 浅黄橙色	1/4強残存
294		土師器 皿N大	14.4	3.2		10YR8/3 浅黄橙色	1/4強残存
295		土師器 皿N大	14.7	2.6		10YR8/3 浅黄橙色	約3/4残存 外面底部ナデ 他部位はナデ調整 口縁部2段ナデ端部は三角形状を呈する
296		土師器 皿N大	14.7	2.7		10YR8/3 浅黄橙色	3/4弱残存

付表9 SD010出土土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
301		土瓶蓋	9.6	4.4		10YR8/4 浅黄橙色	ほぼ完形 天井部に化粧土流し掛けによる放射状の文様 上面のみ施釉
302		土瓶蓋	7.5	1.6	3.5	2.5Y8/1 灰白色	4/5残存 胎土白色(美濃系) 天井部に飴釉 降灰あり 底部糸切り
303		汽車土瓶	8.4	8.9	6.9		白化粧に鉄絵「若松や小なを」の文字 裏面に若松2本の絵柄 内面は土灰釉(オリープ色) 注ぎ口の先欠損 薄作り
304		磁器 小皿	5.7	1.5	3.0	10GY7/1 明緑灰色	ほぼ完形 高台部分に珪砂付着
305		染付 椀	7.7	3.9	2.9		2/3残存 椀の模様
306		湯呑	7.0	5.25	3.5		2/3弱残存 器表は鉄釉のイッチンの上から白い釉薬を垂らし掛け 他の部分は露胎 内側は白濁釉
307		湯呑	8.0	6.2	5.6		1/2弱残存 器表は鉄を塗った後白化粧をし 鏝絵・呉須絵の絵付け その上に透明釉を掛ける 内面白化粧
308		赤絵 猪口	5.2	3.2	3.0	N8/0 灰白色	3/4残存 赤絵による花鳥文様
309		塩壺蓋	7.2	1.9		5YR6/4 にぶい橙色	ほぼ完形 内側に布目
310		塩壺蓋		1.5		5YR8/2 灰白色	ほぼ完形 刻印あり「深草砂川□□」 器表ミガキ
311		焼締陶器 搦鉢	31.9	13.6	17.7	2.5YR4/8 赤褐色	1/8残存 胎土は粗め 白色粒多い 練り甘く練り込み状

付表10 平安時代以前の遺物一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
297		石鏃				10Y5/1 灰色	長さ2.2cm 幅1.1cm 厚さ0.2cm サヌカイト製
298		須恵器 杯身	最大径 12.9			N7/0 灰色	外方に伸びる受け部と底部の破片 外面底部はケズリ
299		須恵器 高杯	11.0			N7/0 灰色	立ち上がりはやや内傾し端部は外方につまむ 稜は小さく突出しその下に2条の波状文を巡らす
300		須恵器 甕	(15.4)			5B6/1 青灰色	口頸部中央に2条の凸帯が巡りその両側に波状文を配する

施釉陶器の底部高台の分類記号は、『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 1990年 による。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょういちぼうさんちょう (うきょうしき) あと							
書 名	平安京右京三条一坊三町 (右京職) 跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001-3							
編著者名	平尾政幸・山口 真・上村和直							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 さんじょういちぼうさんちょう 三条一坊三町 (うきょうしき) あと (右京職) 跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしきょうとがのおちょう 西ノ京梅尾町	26100		35度 00分 25秒	135度 44分 42秒	2001年2月 1日～2001 年10月16日	3,192㎡	保険施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 三条一坊三町 (右京職) 跡	都城	縄文時代		石鏃		朱雀大路側溝・ 右京職東限の確認		
		弥生時代		弥生土器				
		古墳時代		須恵器				
		平安時代前期	掘立柱建物・井戸 ・溝・湿地	土師器・黒色土器・須 恵器・緑釉陶器・灰釉 陶器・白色土器・青磁 ・白磁・黄釉陶器・軒 丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・ 平瓦・丸瓦・硯・土馬 ・墨書土器・石材				
		平安時代末期	掘立柱建物・井戸 ・朱雀大路側溝・ 溝	土師器・瓦器・須恵器 ・山茶碗・白色土器・ 青磁・白磁・青白磁・ 褐釉陶器・滑石鍋・軒 丸瓦・軒平瓦・平瓦・ 丸瓦・硯				
	近世末期 ～近代	建物・溝・土壇	陶器・白磁・赤絵・染 付磁器・塩壺・焼締陶 器					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-3
平安京右京三条一坊三町（右京職）跡

発行日 2002年9月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961